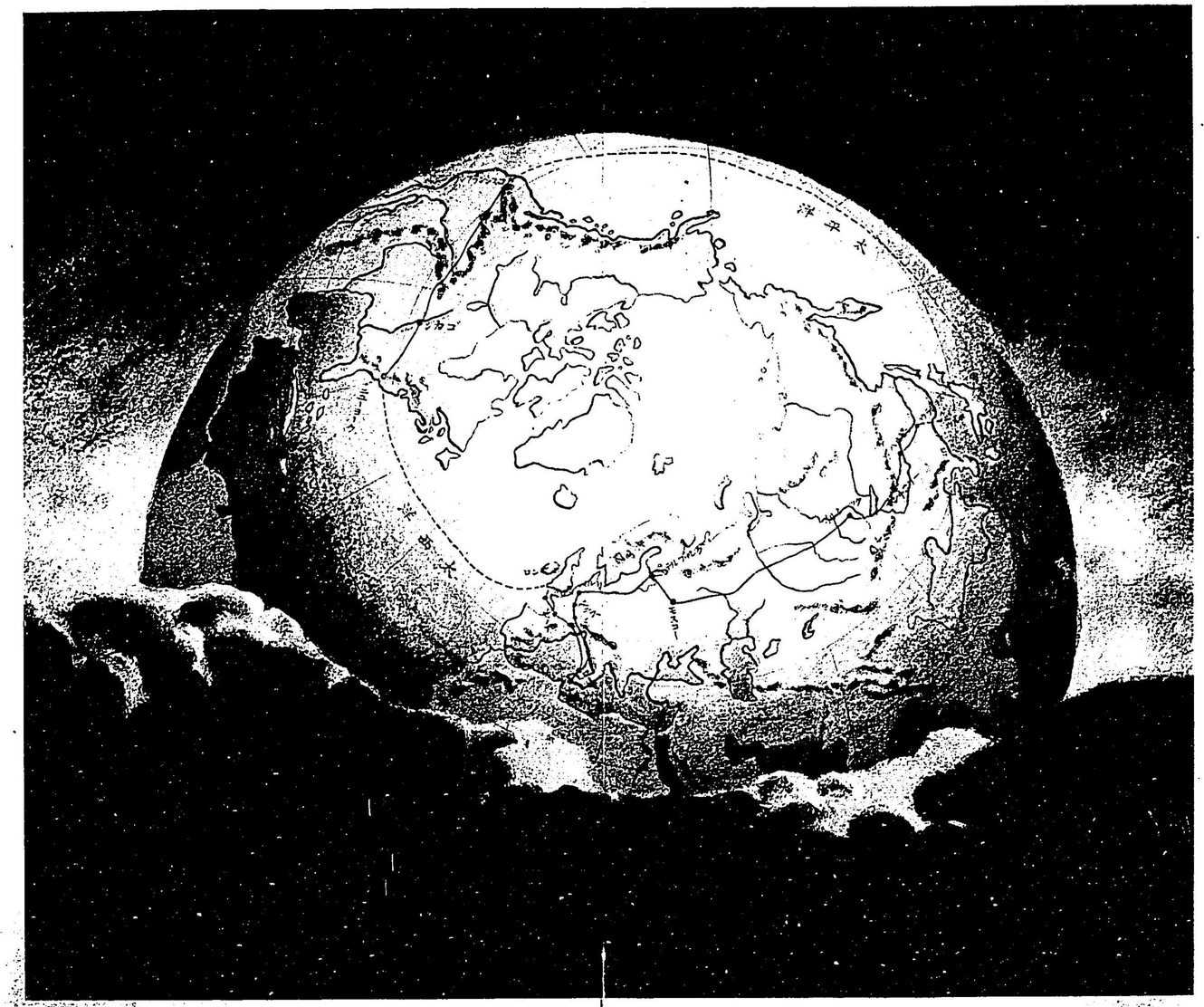
64-75

家に在りては其の親に孝ぎては其の
夫に、夫死しては其の子に、子長じて後
は其の孫に、そゝ渾身の愛をそゝぎて
片時の安きを偷み玉はざる
わが最愛の母上に
再び此のはかなき小冊子をさゝげま
つる。

明治
40 2 2
内交

著者半球周遊行程



FOR IESVS SAKE FORBEARE,
DVST ENCLOASED HEARE:
MAN Y STARES THES STONES
T
E HE Y MOVES MY BONES.

Taken direct from the tomb of Shakespeare
Rev. Tompkins: Curtidean
June 5th 1907.

Charles Edward Grant of Edinburgh
Great friend of the
House Keeper of Stoneleigh Abbey
Mrs McCracken also Scotch June 1st 1907

T. Branson Davenport A.M.I.E.E.
Churchwarden St James Great S.on.A.
The Chestnuts S.on.A.

L. Morris
Swan's Nest Hotel
Stratford upon-Avon

GOOD FREND FOR IESVS S

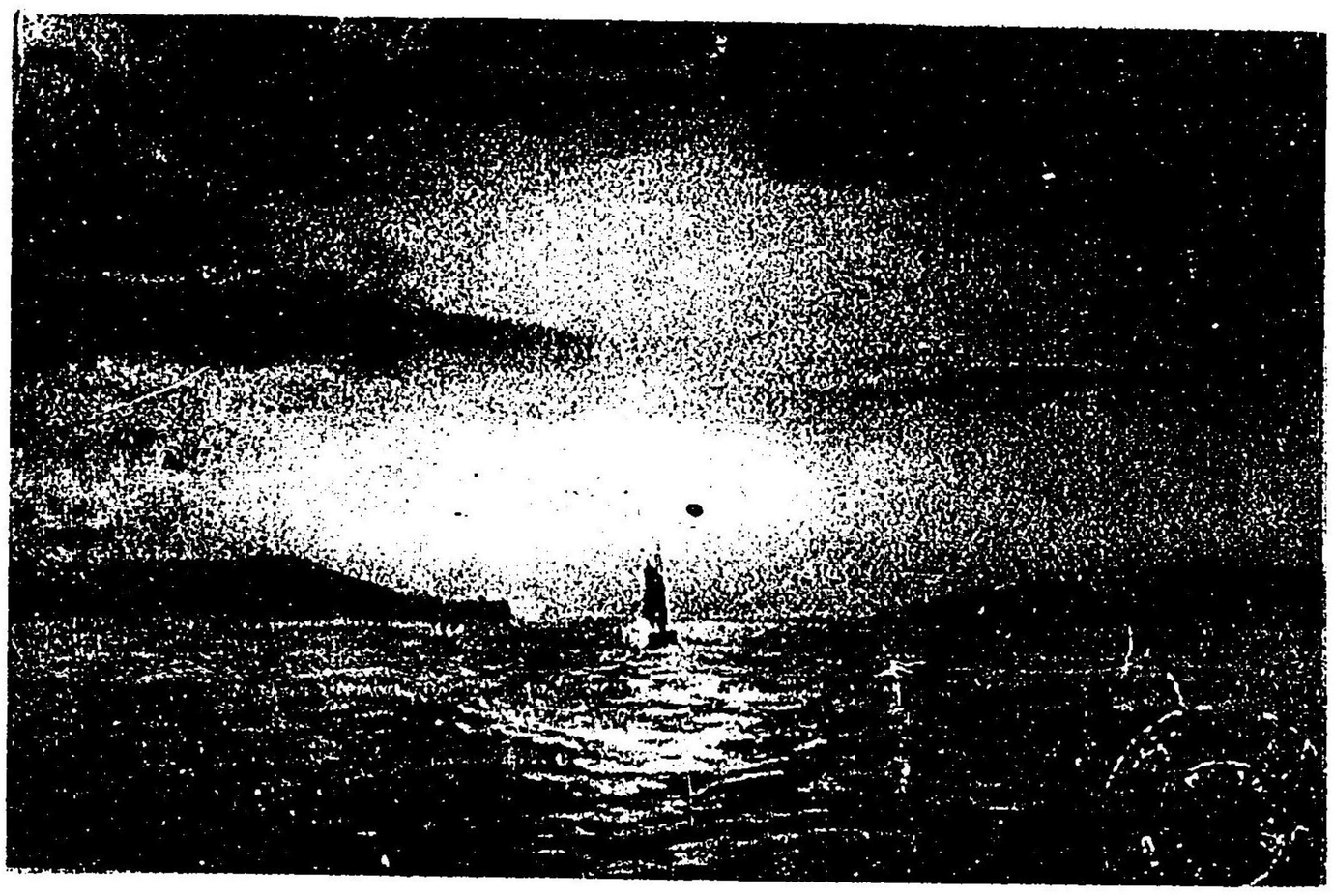
TO DICC THE DVST EN

BLESE BE Ÿ MAN Y STA

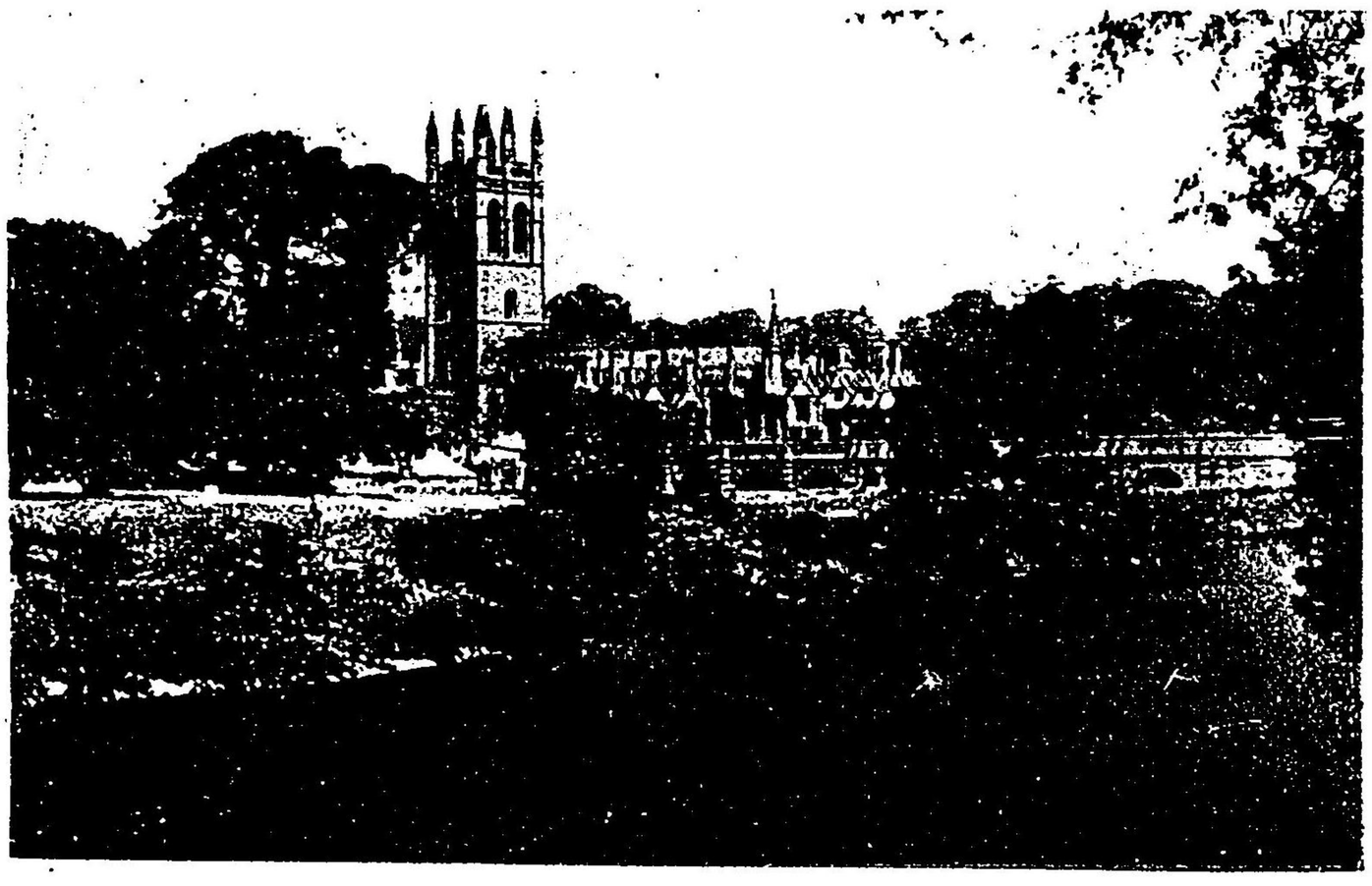
AND CVRST BE HE Y MO

G. R. B. Davies
St. Clements House
Leamington Spa

Charles Edwards Grant of Edinburgh
Great friend of the
House Keeper of Stoneleigh Abbey
Mrs McCracken also Scotch since 1st 1907

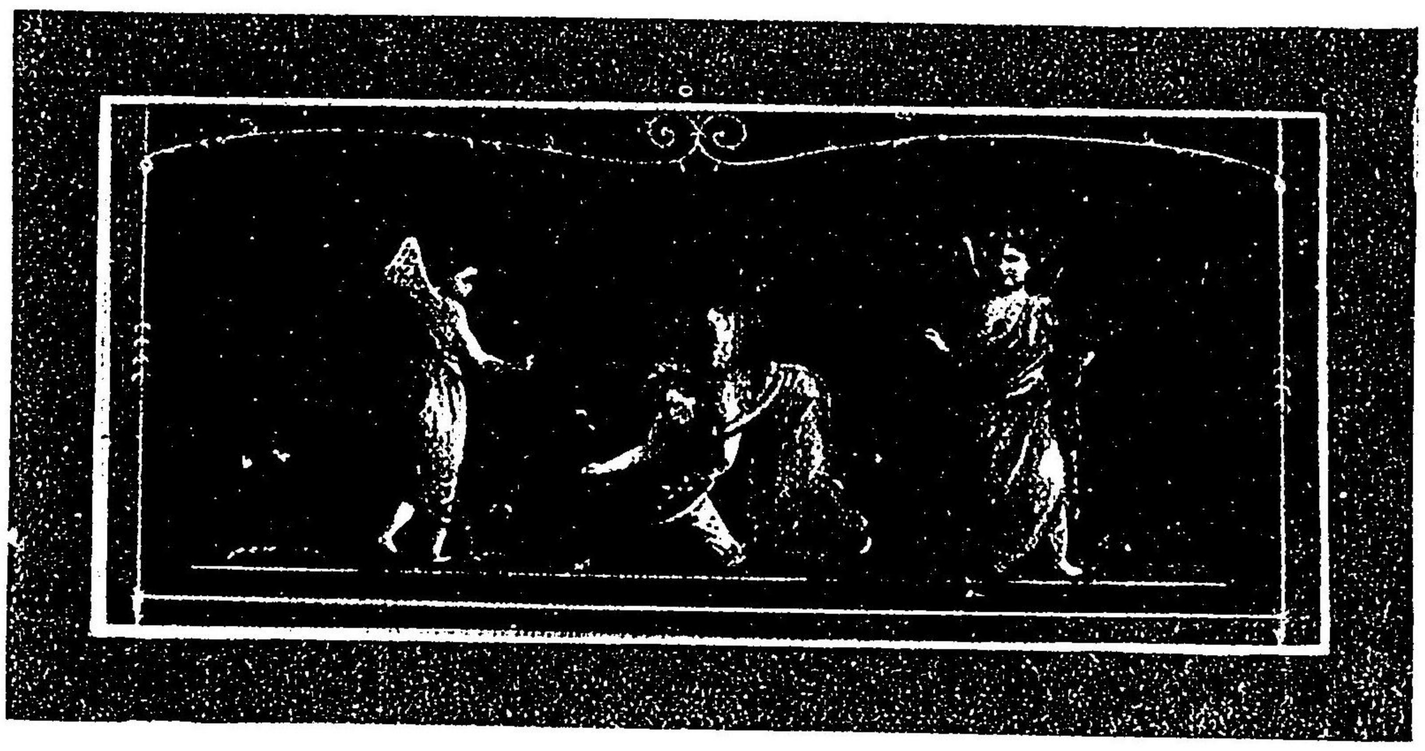


ベラルド トーケンデルゴ

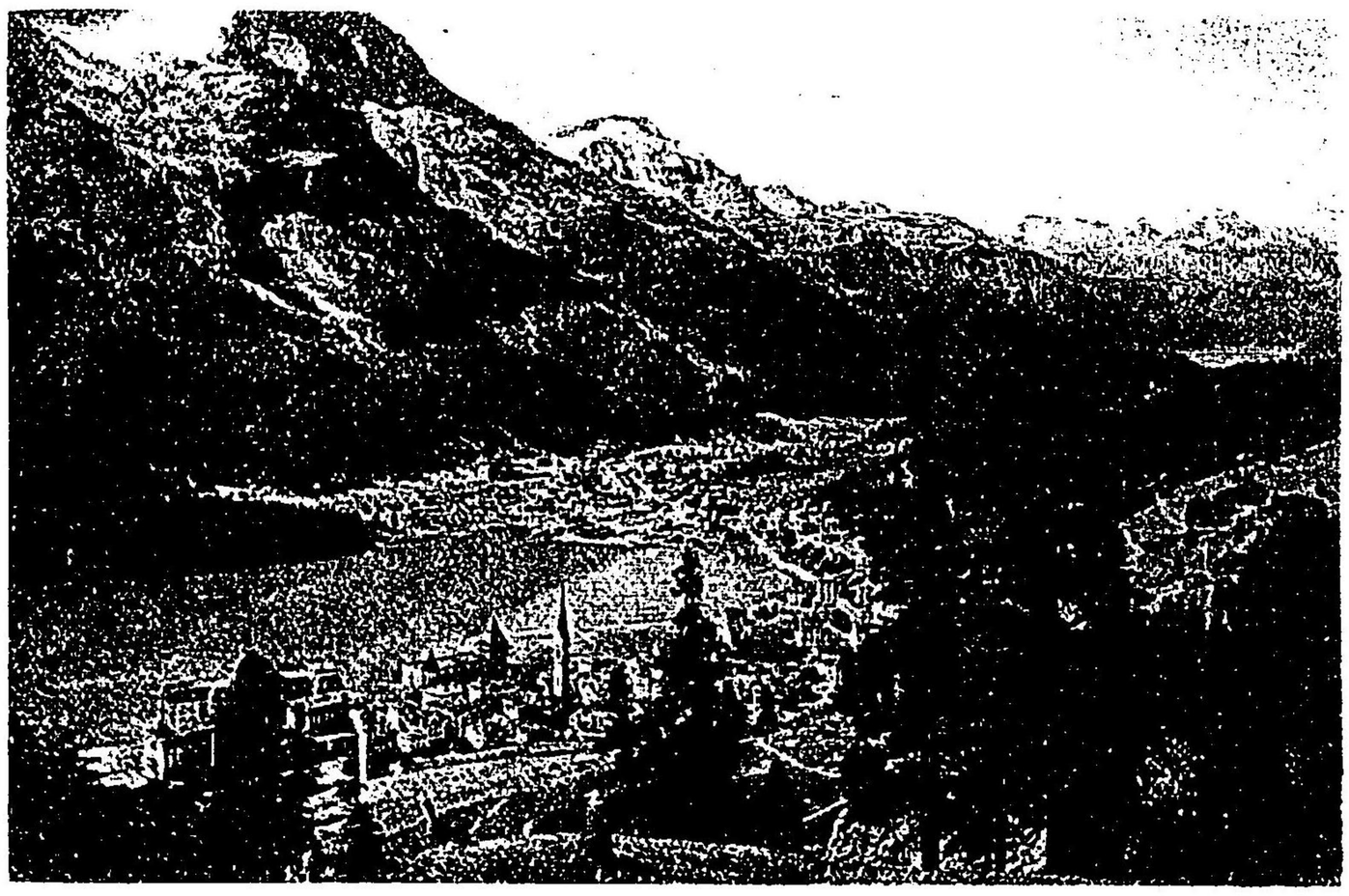


ドーオフスクツオ

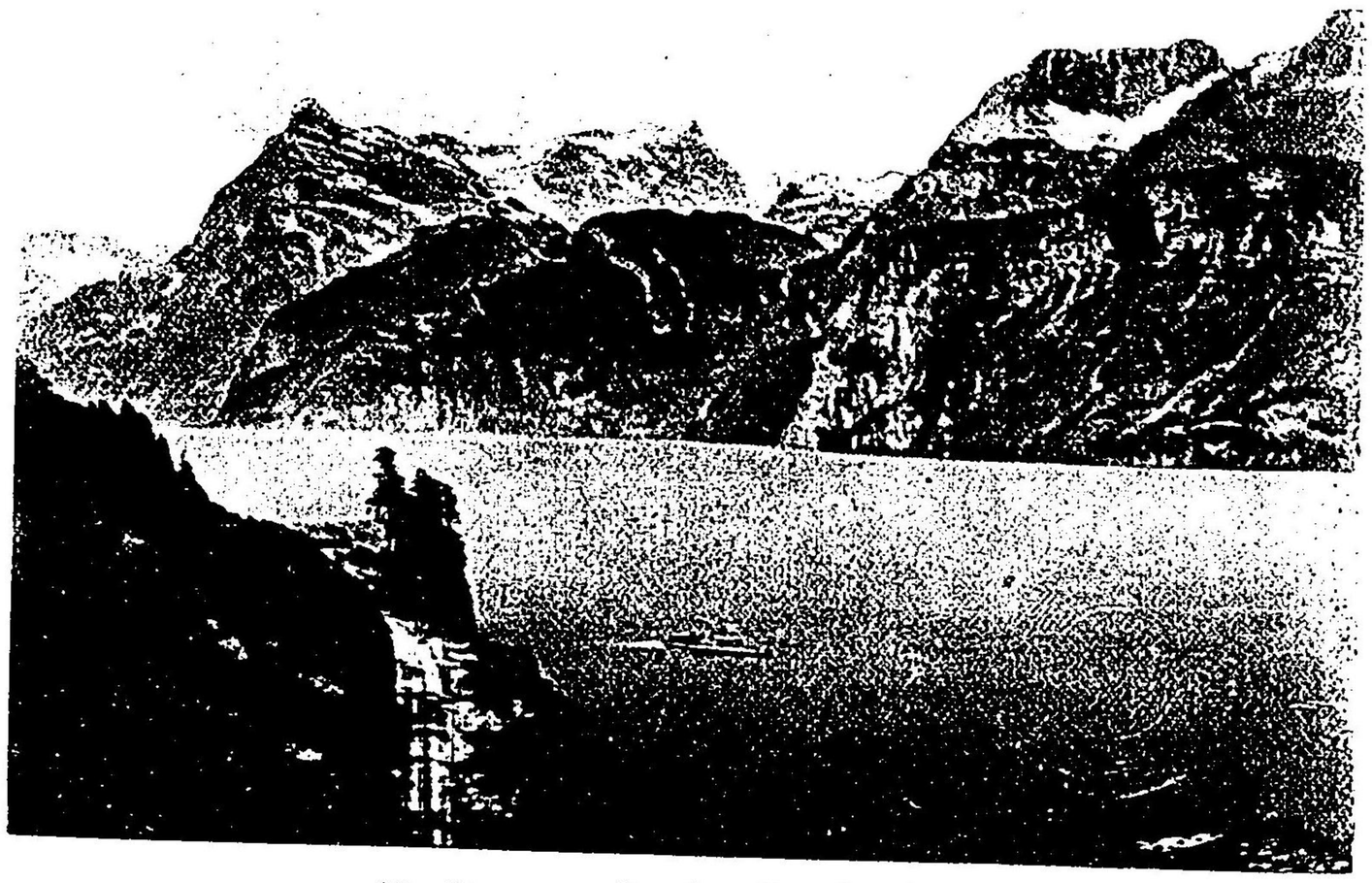
(正面なほるなゝ塔)　(二三二頁參照)



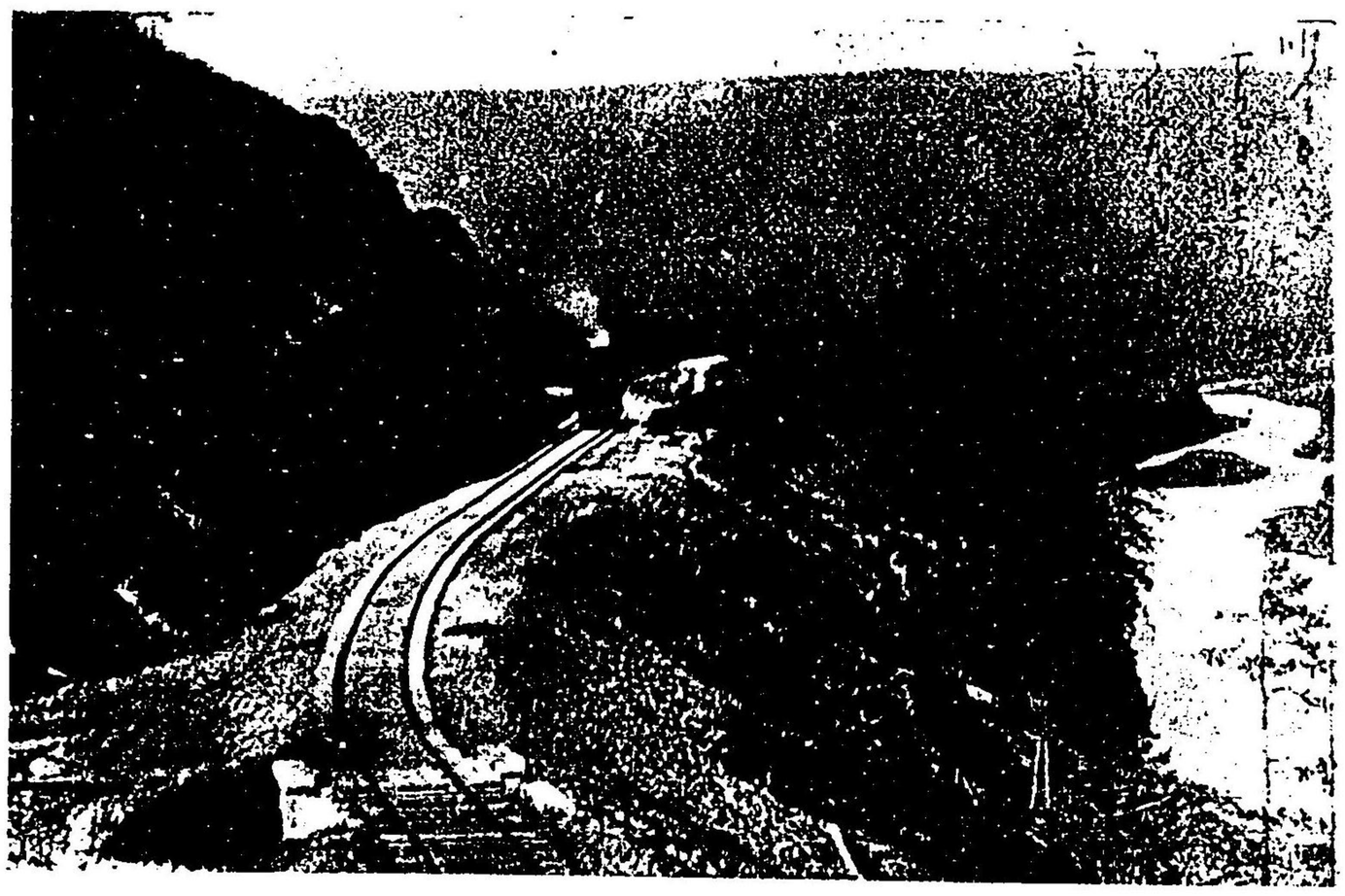
[illegible]の[illegible]



（一〇） 水山の西端



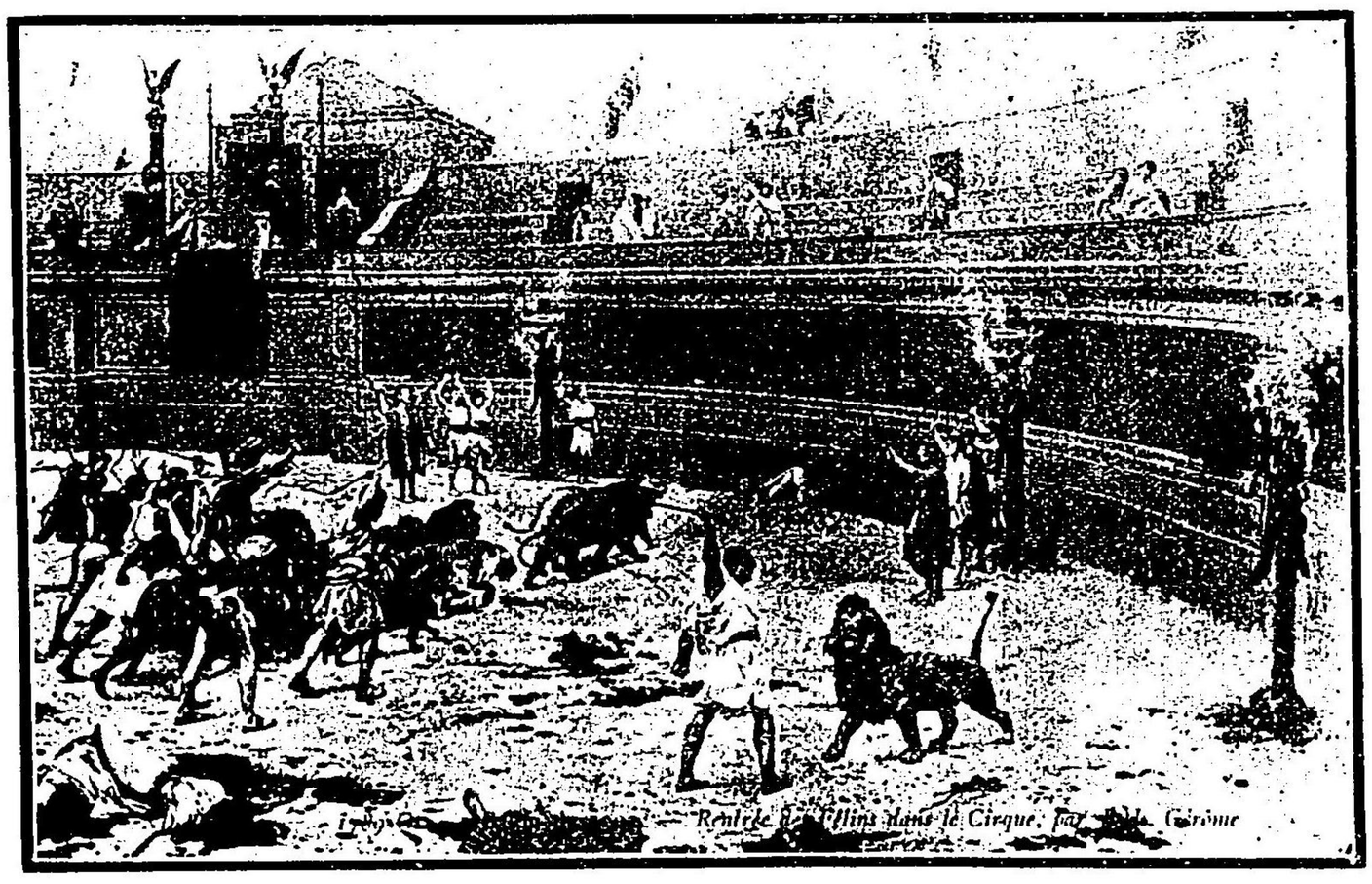
瑞西の山水（二）



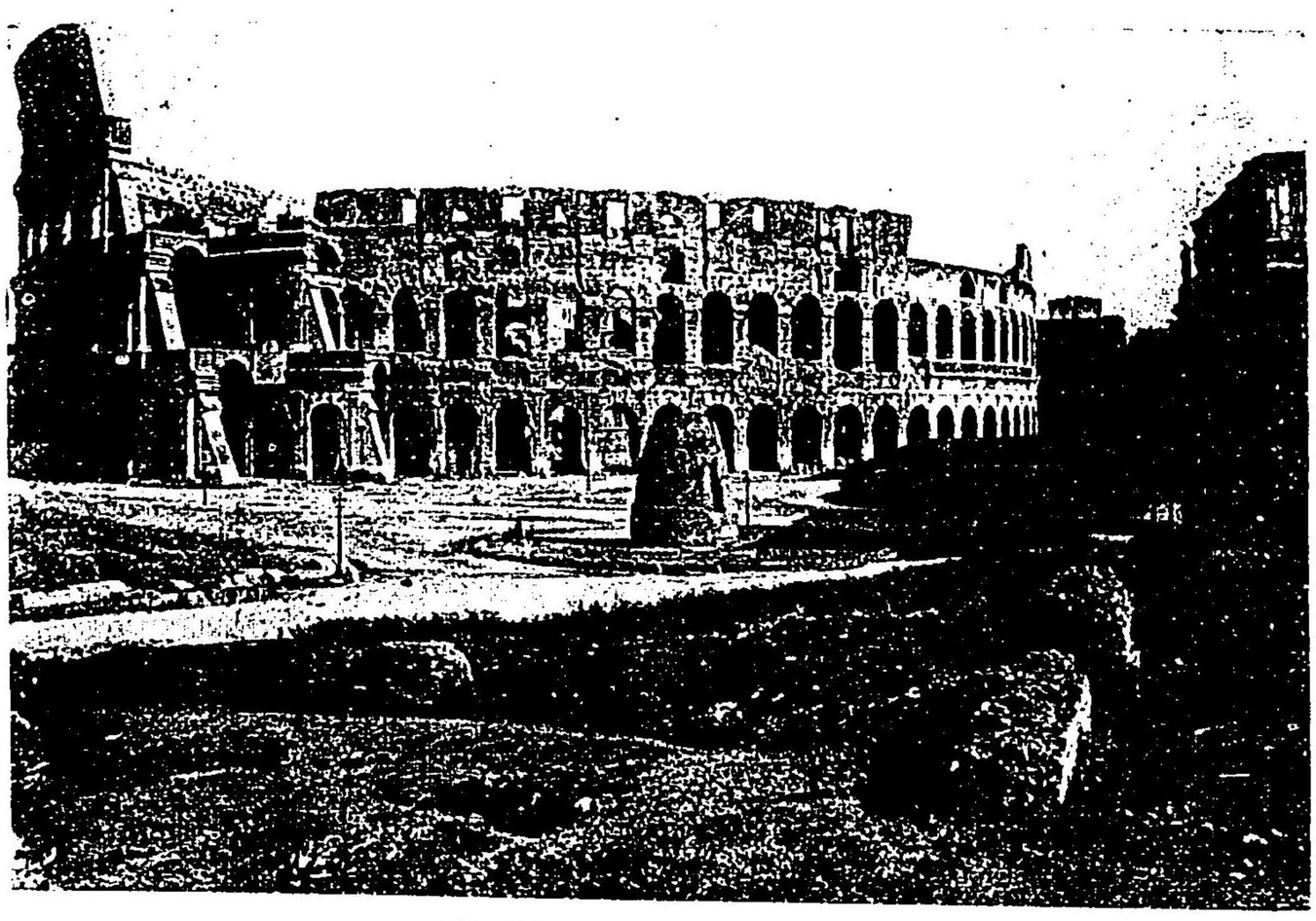
ウラル山の鉄道

クレオパトラの自殺　ギドーレニ畫

羅馬帝政時代の末路　　クルチユール筆

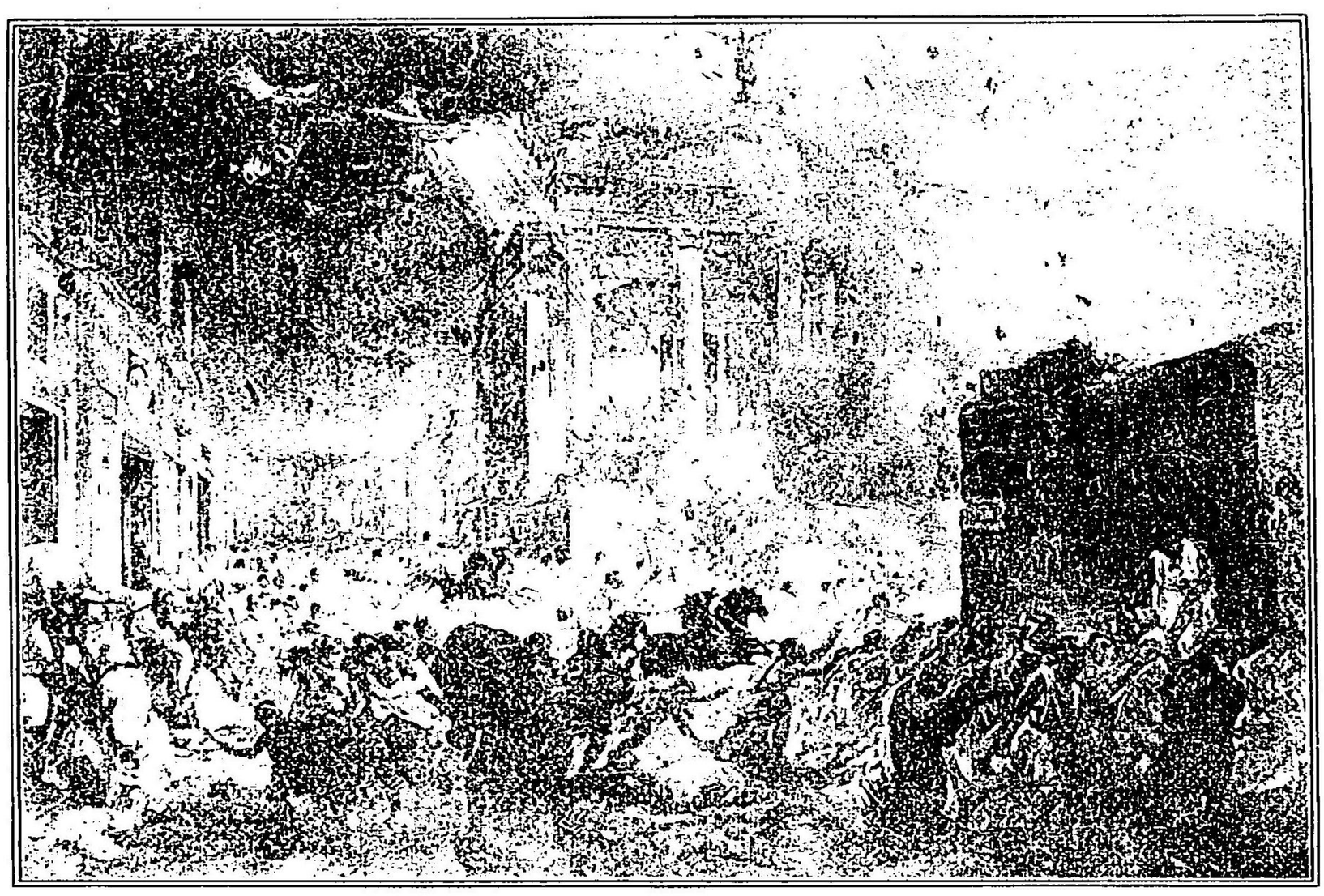


格闘果て〻後　ジエローム筆　（二九七頁參照）



羅馬コロシアムの敗墟　(二九四頁參照)

ポムペイの潰滅　(三一一頁參照)



ポムペイの潰滅　（一一四頁）

ベニスのゴンドラ　（日本郵船寄贈）

第三十八卷

序

楚人冠とは猿といふことなり。猿を以て自稱する程なれば、此男中々サル者ならんと思つても、差閊は無けれど、實は三本毛の足らぬ代りに、三寸ばかりも旋毛の曲りたる變物にて、東京朝日新聞編輯局の關白なり。今春愚僧の徒弟五十四人を連れて西天を周るや、此猿孫悟空然と隨從し來りしは好けれど、時々天崖變化の法を使ひ、觔斗雲に乘りて何處とも無く飛去るには閉口せり。尤も石猿の事とて、猪八戒の如く蜘蛛の化けた美人に捕まるやうな心配は無けれど、彼に離れては愚僧聊か心細き故已を得ず緊箍兒を念じて彼を取押へ置くの必要を感じ、且之を實行せり。然し、彼も自からサル者を以て任ずるだけ有りて、怠けながらも通信の間を缺かず、歸朝の後は又御苦勞にも、毎日々々記行文を綴りて新聞紙に掲げ、永い間讀者を娛ませたり。是殊勝の至と有つて、孫悟空ならば鬪戰勝佛に登用せらるゝ所なるが、元來

如法のハイカラなれば、佛壇には不向なりとの議論も出で、此程靈山の閣議に於て、彼は矢張り新聞記者尊者として朝日在勤に極りたりと云ふお賽錢は少くとも此方が彼のエラなること、愚僧の明知する所なり。流石は如來の善巧方便なる哉。今や大檀越有樂社彼の記行を集めて新西遊記を作り、衆生濟度の爲有料にて廣く世に頒たるゝの企有りと聞く。善哉々々檀越は曩に同猿の著したる大英遊記を出版し、頗る世の淨財を集め給へり。此度も亦然ることを得ば、願くは彼の爲に、一宇の祠堂を山王樣の櫻の木の下に建立し、彼をして優遊自適、其肺病全快以後の天壽を完うせしめられんことを。時到り命盡きて、彼閻白を止め正覺を取ることも有らば、愚僧は遠く極樂の紫雲の上より以心電信を以て御禮を申上ぐべきなり。摩何般若波羅密。

明治四十一年十二月一日　遊外三度法師　臥雲山大夢

序

一書出づる毎に、褒讃響應して、初版盡き、再版賣切れ、忽にして四版五版を重ぬる楚人冠の人氣は素晴らしいもので、吾輩が樂屋より道魔聲を絞つて景氣を附けるに及ばない。併し何か附けなければ、序文にならぬ。依つて景氣の代りにケチを附けて見やう。

さて何にケチを附けたものかと、一卷隈なく繰返せば、唯もう面白くて面白くて堪らない。滿遍なく愉快で何時讀んでも可笑しいのである。宜なる哉楚人冠の文既に定評あり。衆口齊しく贊して曰、輕妙、奇警、洒脫、――强ひて旋毛を曲げて案ずるに、文の極致豈におもしろおかしきに盡きんや。崇重も可、雅樸も可、沈鬱も佶倔も麁莽も古拙も亦可、嘆ず可く、愛ふべく、怨む可く、憤る可きも、亦大に可なるのである。而るに楚人冠の筆は、此等の陰氣な方面を缺いて、徹頭徹尾はしやぎ切つた陽氣文學、何時も正月の微醉主義である。是れ

楚人冠の文定評ある所以であるが、定評の定は不動である、無變化である、釘付けである、一本調子である、極り文句である。左すれば人氣の好いのも、版を重ぬるのも、却つて楚人冠に取つては大なる耻辱と言はなければならぬ。

若し此書公にせられて、從來の定評を打破し、待ち構へた定連を失望せしめ、譏讒四に起つて、人氣滅茶々々に崩れ、唯の一冊も賣れなかつたならば、それでこそ天晴楚人冠と、吾輩僚友は彼の成功を祝して胴上を爲すべきだが、殘念な事には此書も亦日を經ずして品切れになるであらう。寔に以て惜むべし、あゝ傷ましいかな、哀しいかな。と疊みかけてケチを附けて見たが、さて飜つて考ふるに、評判が好くて本が賣れるのでは、格別涙の流れる次第でも無いやうだ。怎麼楚人冠。

明治戊申歳晩

東京朝日編輯局に於て

澁川玄耳

自序

「大英遊記」も愚書なりしが、「半球周遊」は夫にもましたる愚書なり。

斯く此の書を愚ならしめたる所以凡そ三あり。一には、此の書を草するに當りて、著者が餘りに物識顔をし過ぎたるに由る。元來物識といふは、書物さへ讀めば誰にも分るべきことを、左もしたり顔に書き立つるものにして、創意といふこともなければ、著者の個性といふものも沒却せらるゝが常なり。著者が此の書の爲にとて、特に多少の參考書を繙きたることが、著しく累をなしたる也。是れ一つ。次に「大英遊記」の思の外好評なりしに心驕りのたる著者は、初より今回の記事を一書として世に問はんとする、淺ましき野心を藏したり。斯る野心ありしが故に、著者は要もなき所にかに角と無暗に氣取つてのけたり。是れ二つ。昨年は單獨歐亞を走せ廻りたる足手纏ひのなき身なりしが、今年は五十餘人を引連れて、左ながら小日本を代表したる觀ありしが故に、何につけかにつけ、氣の引けること夥しかりき。新聞の一小記事すら、列國の大使館に飜譯せられ、世界の端の新聞紙にも轉載せら

自序

る〻今日、之が爲に澁りがちなる筆の一層澁り增したるを覺えたり。是れ三つなり。此の三つの外に、尙くさ〳〵ありたるべけれど、面倒臭きが故に今は言はず。

人若し此の書の愚なるを見て、物識顏をすること〻、生中なる野心の爲に氣取ること〻、無暗に人の氣を兼ねて感病風を吹かすこと〻の愚なるを知るに至らば、著者は案外の所に案外の知己を得たるを喜ばずんばあらず。倫敦の某毛生藥屋の主人、常に禿頭を店頭に曝して、客の來るを待てり。人其のいはれを聞けば、乃ち曰く、斯く禿頭の醜きを示して、以て毛生藥を賣らんと欲するのみと。是れ誠に著者が恥かし氣もなく此の書を公にするに至れる微意に合す。

右の趣よく〳〵承知の上にて、本文に讀み進まれんことを、わが親愛なる讀者に懇望す。

明治四十一月十二月一日城南大森の忘機樓に於て著者識す。

例言

一、此の書は今春朝日新聞主催世界一周會附特派員として著者が歐米に派遣せられたる時、其の見聞せる所を錄せるものにて、大抵一度は朝日新聞及二三雜誌の紙上に出でたり。一周會員が團體としての行動の記事は、別に收めて拙著「世界一周畫報」(朝日新聞社出版)の中に盡せるを以て、此の書は唯著者一個の見聞と感想とを揭ぐるに止めたり。

二、世界一周會は三月十八日橫濱を發し、米英佛伊瑞獨露の七個國を經て、六月二十一日敦賀に歸着したるものなり。其の重要なる日程左の如し。

三月十八日　橫濱發、太平洋航行の途に上る
同　二十八日　布哇ホノルに着
同　二十九日　同發
四月　三日　桑港着
同　五日　桑港發
同　六日　ソートレーキ着

例言

四月　七日　同地發
同　九日　シカゴ着
同　十二日　同地發
同　十三日　ナイアガラ着、同日出發
同　十四日　ボストン着
同　十五日　同地發
同　十六日　紐育發拉府を經て華盛頓着
同　十九日　華盛頓發、紐育着
同　二十三日　紐育發、大西洋航行の途に上る
五月　一日　リバプール上陸、倫敦着
同　十二日　倫敦出發、巴里着
同　十七日　巴里出發
同　十八日　ゼノア着
同　二十日　ゼノア出發、羅馬着
同　二十三日　羅馬出發、ナポリ着
同　二十四日、　ベスビアス火山、ポムペイ舊址見物
同　二十五日　ナポリ發、羅馬着
同　二十六日　羅馬發、ベニス着
同　二十七日　ベニス發、ミラン着
同　二十八日　ミラン發、瑞西バール着
同　二十九日　バール發、フランクフルト着、同日出發
同　三十日　伯林着
六月　二日　同地發
同　三日　聖彼得堡着
同　五日　同地發
同　六日　茨斯科着
同　七日　同地發、西伯利亞鐵道にかゝる
同　十八日　浦潮着
同　十九日　同地發、日本海航行の途に上る
同　二十一日　敦賀着

三、世界一周寄報の記事は殆ど盡く旅行中に成れるものを訂正增補したるものなれど、此

の書中の記事は悉く歸朝後に成れるものなり。各篇の末に加へたる日附は其の事ありし日を示したる迄にして、起稿の日時に關係せず。但し旅行中即時に起稿せるもの〻如く裝いに、書きなしたる諸篇頗る多きは讀者の知らる〻所なるべし。

四、此の書には、著者と同じく世界一周會附特派員たりし大阪朝日新聞記者土屋元作君の文五篇を收めたり。標題の下に「（大夢）」の二字を加へたるもの、是なり。

五、世界一周會の行動又は著者が昨年の外遊に關聯したる記事にして、「世界一周畫報」又は昨年の拙著「大英遊記」を誤まざる讀者の解し難からんと思はる〻節々には、特に七號活字を以て番號を加へ、之に對する註解を卷末に附しおきたり。就て見られんことを望む。

明治四十一年十二月一日

半球周遊目次

太平洋小品

上、洋上の風雨……一
中、ワイキ、の曉……五
下、檢疫と荷物檢査……九

北米小景

一、ネバタ山中の電報……一四
二、ソートレーキの夜食……一七
三、我觀ボストン……二一
四、マニキュール……二六

目次

五、費府の寫眞責め……三〇
六、リンコルンが家……三五
七、マウント、ヴアノン(大夢)……四〇
八、紐育の懐舊(大夢)……四四
九、盛なる哉紐育(大夢)……四
十、水野總領事……五四
十一、ホテルの消防設備……五八
十二、クロースン哲學……六二
十三、分らぬ亞米利加……六六

大西洋即事

上、無線電信……七三

中、「沈沒」……七七
下、濃霧……八一

後の倫敦

一、倫敦の新聞記者……八五
二、倫敦の舊識……八九
三、ウエストミンスター懐古……九三
四、後の「ミカド」……一〇一
五、後のスタインバーグ老人……一〇四
六、新聞記者責め……(一一二—一二〇)
上……一一二
下……一一六

目次

七、後のデビス老人……一二〇
八、後の英國議會……一二四
九、後の「タイムス」……一三四
十、後のサットン、プレース……一三八
十一、シルクハットの滅亡（大夢）……一四二
十二、妖曲ネルソン（大夢）……一四六
十三、非寶石同盟……一五〇

レムの里

一、はしがき……一五五
二、レミントン……一六三
三、デビス老人……一六六

四、午餐……一六八
五、ストーンレー、アベ……一七〇
六、デビス一家……一七二
七、レミントンの公園……一七三
八、ホウキットナッシュ村……一七五
九、技師が家の晩餐……一七八
十、土産の懐中時計……一八〇
十一、沙翁の生地……一八四
（ストラトフォード、オン、アボン）
十二、村の緑日……一九〇
十三、古城の敗墟……一九四
（ケニルウォース城）

目次

目次

續レムの里

一、未見の知己……二〇二
二、クロムウエルの生地（ハンチンドン）……二〇五
三、雨の田舍道……二一四
四、村の日曜日……二一八
五、分れの接吻……二二二
六、公園の音樂會……二二六
七、オックスフォード……二三〇

續々レムの里

一、日曜の汽車……二三七

二、舊知の山川……二三九
三、日曜の午後……二四三
四、ナイチンゲール……二四六
五、村の月曜日……二四八
六、附記……二五二

巴里半面

一、巴里の電報難……二五六
二、不思議の會合……二六〇
三、モンマルトル……二六五
四、巴里の大下水＊……二六九
五、凱旋門の上……二七三

目次

目次

六、ラビノ氏を憶ふ……二七六

伊國鴻爪

ゼノア

一、ゼノアの町々……二八二
二、フリーメースン……二八六

羅馬

三、該撒城址の小酌……二九一
四、月のコロシアム……二九五
五、古羅馬の曉……三〇三
六、米國大使の傳言……三〇八
ポンペイ

七、ポムペイの埋沒……三一二
八、ポムペイの今昔……三一七
九、ポムペイの市街……三二二
十、ポムペイの家々……三二六
十一、ポムペイの秘密……三三一
十二、ポムペイの浴場……三三四
十三、ポムペイのフォーラム……三四一
十四、ポムペイの選擧運動……三四五
十五、ポンペイの劇場……三四九

ベニス

一、ベニスの夜半……三五三
二、ゴンドラ……三五七

目次

目次

中歐東歐

一、瑞西の山河……三六〇
二、獨逸の生氣……三六四
三、伯林の長夜の宴……三六八
四、露都の不夜城……三七一
五、莫斯科の夜汽車……三七六
六、「セイ、チヤス」……三八〇
七、シベリアの夕月……三八六
八、マンテリ……三八九

目次終

挿畫目錄

口繪

半球周遊行程（コロタイプ）
沙翁墓碑銘（石版）
ゴルデンゲート（三色版）
オックスフヲード（三色版）
ポムペイの壁畫（三色版）
瑞西の山水の一（三色版）
瑞西の山水の二（三色版）
ウラル山の鐵道（三色版）
クレオパトラの自殺（ギドー、レニ筆）

目次

目次

羅馬の末路（クルチユール紙）
拾圓果てゝ後（ジエローム紙）
羅馬コロシアムの敗墟
ポムペイの潰滅
ベニスのゴンドラ
瑞西の山すべり

太平洋小品

ワイキヽの海水浴……三
ホノルヽの市街……五
布哇の鳳梨畑……七
桑港カリフヲルニヤ街……一一

北米小景

シエラ、ネバタ山中……一五
ソートレーキ……一九
華盛頓が第一令を下したる楡の大樹……二三
ボストンの大停車場……二五
ボストンのホテルの前……二七
獨立閣に藏せる自由の破鐘……三一
リンコルンの生家……三七
マウント、ヴアノン……四一
紐育の夜景……五〇
高峰博士……五九

目次

目次

シンガー、ビルヂング……六七

大西洋即事

尾上新兵衛、土屋大夢、井上德三郎……七八

後の倫敦

スコット君……九〇
ウエストミンスター橋……九八
野村美智子夫人……一〇五
テームス河畔の夜景……一二一
サットンプレース……一三九

レムの里

ウヲリックの舊家……一四六
レミントンの菩提樹通……一七四
ホウキットナッシュの寺……一七六
ホウキットナッシュの家々……一七七
ウヲリック城……一八一
詩聖シエークスピーア……一八五
スワンス、ネスト、ホテル……一八九
ケニルウヲースの小川……一九五
「ケニルウヲース」の二主人公……二〇〇

續レムの里

ハンチンドンの町……二一一

目次

「英蘭の中心」……二一九

續々レムの里

レミントン郊外……二四七
レミントン公園の日曜日……二四九
デビス老人……二五三
四十年前の福澤先生……二五四

巴里半面

ノートルダムの怪像……二五七
雨中の巴里……二六一
カバレ、ヅ、ネアン……二六七

ナポレオンが讓位の勅書……二七〇

伊國鴻爪

カステラクチオ城趾……二八三
ゼノアの鋼索鐵道……二八七
羅馬第二帝政の始祖アウグスタス……二九二
瀕死の劒奴……二九六
コロシアム內部……二九九
羅馬フヲーラムの跡……三〇四
パラチン丘の敗墟……三〇六
羅馬郊外の上水道の跡……三〇九
ベスビアス登山……三一三
ポムペイ市地圖……三一四

目次

目次

ポムペイのスタビア通……三一八
昔のポムペイのフヲーチユナタス街……三二四
同　跡……三二五
ポムペイの家の間取……三二七
昔のアトリアム……三二八
同　跡……三二九
ポムペイの家の雛形……三三〇
ポムペイの大通……三三二
昔のポンペイの浴場の廣庭……三三六
同　跡……三三七
昔の婦人冷水浴場……三三八
同　跡……三三九

昔のポムペイのファーラム……三四二
同　跡……三四三
ポムペイ大劇場の跡……三五〇
ベニス大運河の河岸……三五四
ベニスのサン、マルコの廣場……三五八

中歐東歐

瑞西の山水……三六一
露都イサック寺院……三七三
露都ネフスキー、プロスペクト……三七七
莫斯科ウエルスク街……三八一
アレキサンドル帝記念碑……三八四

目次

半球周遊

太平洋小品

上、洋上の風雨（一）

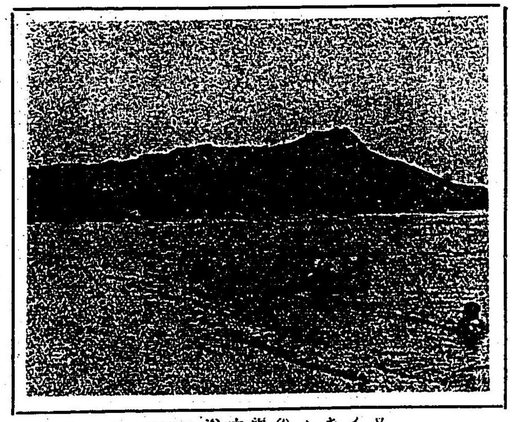
楚人冠 杉村廣太郎 著

横濱を出でゝより此に五日、船が野島崎にかゝつた頃から吹き初めた風は、其の後次第に吹き募つて、どう〳〵と舷に打ちつくる波の音は、閉て切つた船室の中迄物凄く聞える。流石に二萬噸の巨船とあつて、甚しい横ゆれはないが、何うかした拍子に縦に軸が水をかぶる時は、ずる〳〵と身ごと前の方へ持つて行かれさうな。船長の話では、今しも風は一時間四十九哩を走つて居るといふ。風なんといふものは、軸まれもせぬに御苦勞な走り方を

するものだと、寢室の中でうと〳〵しながら考へる。

ぶッちやアんと波が右舷に打ちつける。船がごうごうばかり前へのめる。空を切る暗車の響がが〳〵と枕頭迄ひゞいて聞える。同時にしゆうッとシャンペン、サイダーを拔いたやうな音の大きいのが耳に入る。舷に打ちつけた水が打ちつけた勢で舷側を這ひ上る音だ。頓がて遙か上の方でしやア〳〵と驟雨の一時に降つたやうな音が聞えて、夫れがつい船室の際までぶちやア〳〵と落ちて來る。舷側を這ひ上つた水が十餘丈の水柱となつて上甲板へ颯と落ちたのである。同時に左舷の中甲板で氣たゞましい靴の音が右往左往に聞えて、きやッきやと女の笑ふ聲がする。甲板に出て居た婦人客が今の水を頭からひッかぶつたものと見える。

一旦船室に入つて居りはしたものゝ、迚も此の調子では眠れさうにもないので、又もや上着を引つかけて二階の喫煙室に出かけて見る。片隅に碁を圍んで居た杉原榮三郎君(三)の、何が可笑しくてか、喫煙室も破れよとばかりの高聲で笑つて居るのが先づ目につく。見渡せば



ツイキヽの海水浴（五月末頃）

長椅子に凭つて書物をよむもの、卓子を圍んで骨牌を鬪はすもの、バーの前に立つて連りに酒をあふるもの、譯もなくぢよぼりんと唯獨り煙草を吹かすもの、なか〳〵賑しい。見たところはなか〳〵元氣がよさゝうなが、其の實船室に入ればむかつくといふので、强て喫煙室の賑ひに氣を紛らさうとて來た者もある。

突然戸を排して驅け込んだ若い亞米利加人がある。見ると頭から衣物までづぶ濡になつてふう〳〵言つて居る。今しも甲板で潮水を浴びせられたのだ。一同は

洋上の風雨

知ると知らぬとを問はず皆笑つた。いや私は先刻船室の前の廊下でスカイライトの隙から一杯やられたといふがある。僕は又汚い話だが手水場で上から浴びたといふものもある。之が緒になつて、大分水を浴びた手柄話が彼方此方に初まつた。

右舷の甲板に出て見る。ひゅう〳〵と吹きつくる風面を撲つて、一歩も踏み出せぬ所か、悪くすると足を取られて倒れかゝる。其の上降りみ降らずみのぢばたら雨は、又しても意地悪く落ちて來る。左舷に出ると暗にもしるき波の花が、山と峙だち谷と崩れて、光とも言ひ兼ぬる薄い潮の光が、波の躍る毎にちら〳〵と躍る。

『アッ！星が見える。』誰やら甲走つた聲で後の方から叫んだ。『ドレ〳〵何處に』と喫煙室を馳け出して來る者が一人二人、續いて又三人四人。成程星と云へば星らしいのが唯一つ黒ずんだ空に一寸見える。――五日の風雨にうんざりして唯一つの星が斯ほどに珍らしくなつて來たのである。（三月二十二日）

中、ワイキ、の曉（三）

ホノルルの市街

ワイキ、の曉

昨夜したゝかにあふつたヂンが利いて、臥床に入る頃は殆ど前後不覺であつたが、長長の船中で朝飯の銅鑼に驚かされたのがいつしか癖になつて、今朝は未明に眼が覺めた。小氣味よくも高く釣つた白麻の蚊帳越しに外面を見ると、窓際までおつかぶせたやうに茂つた椰子の葉が、そよ風に

ちら〳〵と動いて、軒端にはしと〳〵と降る雨の音。蚊帳の中にはまだ尾上新兵衛君(四)がいぎたなく寢て居て、急に起きさうにもない。新兵衛一には寢兵衛、我等一行中名うての寢坊で、夜といはず昼といはず、間さへあれば昏々として寢て居る。此處椰子の葉影の薄暗い小窓の下に、白麻の蚊帳を吊つてカナカのやうな黑い男が大の字なりに寢そべつた所は、何うしても布哇の風俗畫中ものたるを免れぬと、僕はつく〳〵いやになる。

『オイ起きんか』と起して見る。『起きてもいゝが子』と來る。『いゝが子』は驚いた。『濱へ行つて見やうぢやないか』『行つて見やうか子。』何處迄も往生際の惡い新兵衛君を促して寢室を出ると、別室に泊つた田島達策君(五)も出て來る。主人の芝染太郎君も早ぐから起きて待つて居る。布哇新報の記者芳我村上の二君も出て來た。芝君は布哇新報の社長で、僕等は昨夜つい近所の料理店望月で御馳走になつて、此の新報社の社宅を兼ねた芝君の家へのたれ込んだのである。ホノルヽには日本の新聞が四つあつて、朝夕に二つづゝ出る。布哇新報は朝刊であるが、芝君は外に今一つ夕刊新聞も有つて居る。昨夜ヤング、ホテルで催さ

れた一周會の大晩餐會の記事は、今朝三時に電話で芝君から送つたのださうだが、夫れがちやんと今朝の新聞に出てゐる。朝刊の配達が日本から見ると大分遲いに相違ないが、夫にしても三時に送つた原稿が間に合ふとは便利極まる。日本でもせめて市内版だけは、三時四時の原稿でも間に合せるやうにしたいものだと僕は思つた。

打連れてワイキヽの濱邊に出て見る。雨が大分小降になつて何やら雲も薄らいで來た。さく〳〵と踏み込む白砂の上を浴衣がけで歩いて行く。椰子の若い木が水際近く

布哇の瓜梨畑

ワイキヽの晩

迄生えて、見返れば山も野も鬱葱たる一面の綠樹、高く低く連なつてゐる。遠淺の海をすつと眺め渡せば、遙に小艇が來往する樣如何にも長閑な。今日三月二十八日が丁度日本の六月末か七月初の暖かさで、雨さへ降らねば、船に疲れた身を砂の上に横たへて、のんびりと話しても見たい樣な心地がする。

初は、暑くるしい半熱帶の地に甘蔗や甘蕉がぼしや〳〵と生えた位の所と額を括つて居た僕も、昨日ホノルヽに着いて以來大分彼地此地で參らせられた。先市中に馬車を驅るべレタニア街の邊蔦々たる椰子の並樹が道を挾んで見る目遙に打つづく、兩側には熱帶植物に滿ちた庭を前に控へた家々が木の間〳〵にほの見える。更に歩を郊外に進むれば、芭蕉椰子マンゴー麵麭樹の青々しきを初め、名も知らぬ花の色々目覺むる許りに咲亂れて居る。バリの懸崖幾百丈の脚下にオアフ島の半面を見下しつべきところ、カピオラニの園、ワイキヽの濱、成程太平洋の樂園と言ひ囃さるゝほどのことはある。

之でホノルヽには從來泥坊といふものが全くなかつたが、近頃朝鮮人がぼつ〳〵入込んで來て、此奴等が時々泥坊を初めることになつたと芝君がいふ。八九月の頃は流石に大分暑いことは暑いが、夫にしても到る處樹蔭が多いのと午後には必ず驟雨が來るので、餘程凌ぎ易いと今一人がいふ。『之で王朝時代に日本の當局者が今少し切り込んで置いて呉れてあつたら、市民權でも歸化權でも何とでもなつたものを。夫が氣の利かなかつた許りに、見玉へ、島中の大多數を占むる日本人が、唯多數といふだけの話で、政治上に何として見やうもないぢやないか』と、又一人が慨然として言ふ。

其の中食事が出來たとの報せに、一同芝君の家の食堂に立ち歸る。村上君が心血を飛いだ料理とやらで、魚の多い所だけに朝から魚の味噌汁が出る。（三月二十八日）

下、檢疫と荷物檢査

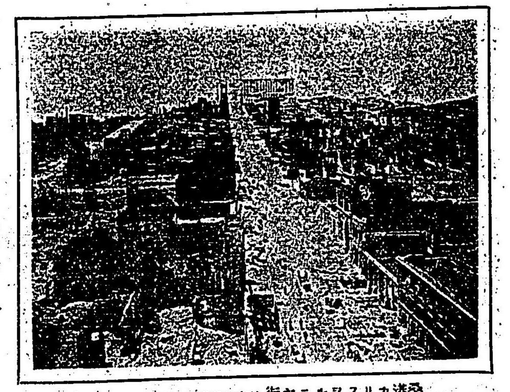
午後三時十五分にゴールデンゲートを過ぎてから、今迄にもう何時間經つたと思ふぞ。先づ檢疫船が來て檢疫醫が乘り込む。一等船客一同大食堂に呼び集められて、事務長が

檢疫と荷物檢査

變な所にアクセントをつけて船客の名を讀み上げる。讀み上げられた者は、一人々々檢疫醫の列んだ段階子の下を通つて上へ出て行く。『ミストル、アサヤーマ』(六)「ヤ」で調子を上げて少し引ッ張つて「マ」で下げる、成程山のやうに聞える。『ミストル、ヘーガ』、日本人の給仕が氣を利せて『芳賀さん(七)』と讀み直す。『ミストル、ホーライ』、之は堀(八)だ。『ミストル、アイカイ』、之は猪飼(九)だ。『ミストル、キャッダ』、勝田忠一君(十)が出て行く。『彼奴だ〳〵』、皆くすく〳〵と笑ふ。自分のことを笑つたものかと、左なきだに無愛想な顏をしたモンゴリア號の事務長は、益むづかしい顏をする。

檢疫は五時に濟んだ。今度は稅關の小蒸氣が着く。之にはクック社の桑港支社長ストーク君やら、朝日新聞社桑港特派員清瀨規矩雄君などが便乘して來たので、陸上の樓樓明日の見物の次第などを語り合つて、大分賑やかになつて來た。稅關附の官吏が來て、大藏省から桑港稅關長へ宛てた書面の寫を呉れる。見ると、一周會員の荷物は東京駐劄大使の照會があつたので、一々檢査を加ふるに及ばぬとの內訓である。

檢疫と荷物檢査



桑港カリフフルニヤ街(正面の建物はフエアモント・ホテル)

其の中新聞記者が來る、出迎へ人が來る、汽船會社の雇人が來る。甲板は上中下ともぎつしりと人で埋まつて仕舞つた。陸の方を見ると、いつしか我が船は港目近に進んで、桑港の町々はつい鼻の先に見える。我等の泊るべきフエアモント、ホテルは高い丘の上に突立つて居る。夫から下の方へかけて、カリフヲルニヤ街の坂道を、斷間なく鋼索鐵道の往來するのが見える。地震の時に燒けたのが彼處、近頃建てかけた市廳はあれと、甲板の上の評定とり〳〵頗る喧しい。

檢疫と荷物檢査

六時が七時になつても、船はひた〳〵と波止場の際まで押し寄せて居ながら、まだなかなか着けさうにない。其のうち又しても銅鑼が鳴る。孰れも澁々食堂に下りて、例に依つて旨くも何ともない晩餐の卓子に就く。食事がすんで又甲板に出ると、日は既にとつぷりと暮れて、やつとのことで船は棧橋に横づけになつたらしい。時計を見ると早や九時、ゴールデン、ゲートから此處迄に四時間かゝつた勘定になる。

棧橋に出て見ると、がらんとした大棧橋の屋根の下に、三つ四つ卓子を列べて稅關の役人が蠟燭の光で手荷物の檢査をして居る。卓子の側が僅に少しばかり明るいだけで、其の外は電燈一つ點けず、眞黑闇のまゝで何處を何方に行つて宜いかさつぱり分らぬ。此處でさん〴〵待たせられて、彼此三四十分も暗黑の中に立つた後、漸く棧橋の外に出ることが出來た。持ち出したのは形ばかりの小さな手荷物で、大きなトランクは明朝取りに來いとのことだ。人を馬鹿にするにも程があると皆ぶん〳〵する。

後で聞けば、何でも太平洋汽船會社と稅關だか棧橋會社だかとの間に、前々からひどい

確執があつて、之が爲に船の着くのも遲くなれば、燈光一つない棧橋の中に人を立たせるにも至つたのだといふ。喧嘩なら喧嘩でも宜いが、其の尻を繰もゆかりもない船客にもつて來ることはひどい。翌日の新聞には、此の闇の中に掏摸が何人どやら入り込んで、何々の品が盜まれたとのことを擧げて、盛んに會社の不行屆きを攻擊したのがあつた。

玄關番の書生に不作法な取扱ひを受けると其處の主人迄がいやになる。着米早々の此の始末は、少からず僕等に不快を與へた。（四月三日）

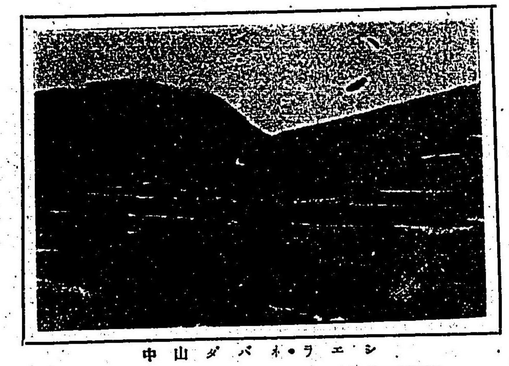
世に肺病の妙藥を覓るほど、大なる罪惡はあるまじと僕は思へり。かよわき赤子の手をねぢ上げて、財物を强奪せんに異ならねばなり。藥の妙なると否との如きは問ふところならんや。――「七花八裂」

北米小景

一、ネバダ山中の電報（二）

汽車は今しもシエラ、ネバダの山中をひた走りに走つてゐる。夕の六時にブリユー、ケニオン停車場を過ぎて、夫れから絶頂まで四十餘哩の間は、すつと一つゞきの雪蓋。

桑港出發以來の模樣を本社へ打電しなければならぬといふことは、桑港出發以來氣にかかつて居る。眺望も何もない雪蓋の中こそ屈强と、此處で一應原稿を書いて見て、兎も角もとて色の白い給仕の黑奴に頼んでおく。色の白い黑奴と言つては可笑しいかも知れぬが、此等の黑奴が其の昔阿弗利加から輸入されて以來、物好きな白人との間に、半血、四分の一混血、八分一混血、十六分一混血などいふ合の子が出來てゐる。僕等の客車に附いたのは八分の一位のものでもあるか、黑奴ながらも色が白い。黑奴を列車の給仕に使ふなどは、蓋し適材を適處に用ひたもので、如何に煤煙を頭から被つても決して汚れる氣遣ひがない



シエラ・ネバダ山中

と、例の新兵衛君が言ふ。

七時三十分に、やつと雪蓋を出て、絶頂停車場に着いた。むら消えの雪が四邊の峰々に殘つて、西の方遙に鮫鏈のやうな新月が懸つたさま、左ながら冬の夕景色である。——頓て少し前に飛出した給仕が息せき歸つて來て、此處からは海外電報が打てぬから、次の驛迄待つて呉れといふ。ぜりふ、コールド、サーと、頻に兩手を揉んで居る。

次の驛はトラッキー停車場。夫迄に電報を書き直して、今度は清瀬君が出かける。出かけたのは宜かつたが、汽車が今にも出るといふ頃になつてあたふた歸つて來て、何も田舍の電信局なんでい

ネバダ山中の電報

ふものは仕方のないものだと頻に慷慨して居る。第一日本へは何處を何う通つて打つのだか分らぬ、三四人居合せた同僚と相談して、やつと夫が分ると、今度は一語の料金が分らぬ、其處等中の料金表を大勢で引つくり返して見て、一人は七十五仙だといふ、一人は四十五仙だといふ、蘭腹り要領を得ない、新聞電報で行くんだと言つても、其の所謂新聞電報なるものが此の邊の田舎者には丸で通ぜぬ、其の中汽車が出さうになつたので歸つて來たのだと、ぶん〳〵愚痴をこぼす。

次の停車場はレノだ。此處に着いた時は早や九時。車中はもうそろ〳〵寢支度にかゝつて彼方此方で寢鼾を作らせる。清瀬君が又飛出した。我等の爲に態々此の車に乘り組んで居る南太平洋鐵道會社の旅客課長ロース君が、事情を聞いて之も助力に出て行く。十分も經つたと思ふ頃、清瀬君一人歸つて來た。旨く出たかと聞くと、出るも出ぬもない、いくら山の中だつて能く斯なに分らぬ奴ばかりを電信局に集めたものだ、日本迄の料金がやつと分ると、今度は何うしても新聞電報で受けつけぬ、此の談判なか〳〵急に纏まりさうにも

なかつたから、後はロース君に頼んで引き上げて來たといふ。唇を尖らして頻に馬鹿だよ馬鹿だよと繰返す。例の色の白い黒奴は二人の話を立聞しながら、白い齒をむき出してにたりと笑ふ。清瀬君の唇の尖りやうで大方夫と察して、『そうれ御覽なさい』と言つたやうな顔。

汽車が出て仕舞つてからやつと飛び乘つたロース君は、急ぎ驅け込んで來て、何ど言つても合點が行かぬから、兎に角普通電信料を拂つて來たといふ、受取を見ると四十八弗と七十五仙――やれ〳〵此の調子で毎日電報を打つて居たら、九十日の旅(二)に凡そ一萬圓はか〳〵る。(四月五日)

二、ソートレーキの夜食(三)

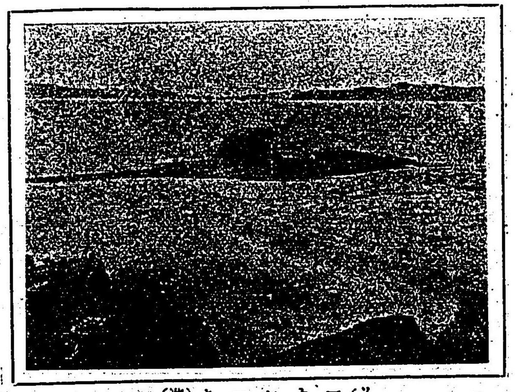
ユトー(ユタではない)の州はソート(さることはソールトでもあらうが、亞米利加では斯う讀む)レーキの市のモルモン宗の本山の大殿堂で催された音樂會を聽きに行つて居た

が、何だか人蒸せに蒸せたやうで息苦しくなつたから、案内して呉れた州知事カットラー君へは内々で、清瀬君と二人そゝと此處をすべり出る。外に出ると夕方からの小雨がまだしと〳〵と降つてゐる。非常に寒い。

『何處へ行く』と後から呼びかける人がある。杉原栄三郎君だ『何處でも宜から尾いて來玉へ』と打連れ立つて門の處まで行くと、又一人後から、『僕も連れて呉れ玉へ』と走せ寄つた人がある。『除り息苦しいから出は出て來たものゝ、實はホテルへ歸る道が分らないんだ』と、さも心細さうに云ふ。見れば高倉藤平君(四)がすた〳〵と來たのであつた。清瀬君の案内で兎に角にホテルの方へと志したが、あとの三人は孰も土地不案内の者ばかりで、東だか西だか丸で分らぬ。何でも電車の通ふ大通りを傳つて、大きな商家の列んだ街道から横に曲つた迄は宜かつたが、此處に來てから、急に何處かで日本食を食はうとの動議が起つた。町の家々は十時近い頃とて大方戸を閉して店を仕舞つてある。やつと一軒、窓先から燈火の洩れるのを見つけて、入口から道を尋ねると、丁寧に日本語で教へて呉れた。

日本人の雜貨店である。何だか夜中に不案内の土地に迷つた揚句、偶然故國の人に會つたので、非常に嬉しかつた。

教へられた道筋を四五間ばかり行くと、果して「すし御料理」と書いた店がある。家の名を「潮月」といふ。名だけはなか〳〵振つて居るなと思ひながら、兎も角も之に入ると、九州辯の男が出て來て注文を聞く。桑港以來オグデン、ソートレーキと、斯う到る處に日本人の居るのは一種言ふべからざる愉快を感じる。世界中何な邊鄙に行つても、必ず日本の店が有つて、日本人倶樂部の一つも有つたな



ソートレーキ(湖)

ソートレーキの夜食

らば、何なに宜からうかなど思ふ。

さしみが出る、吸物が出る、酒が出る、隨つて種々樣々の話頭が出る、夜の深けるのも忘れて就も大分氣焰を揚げた。中にもモルモン宗の多妻主義が又しても問題となつて、千八百九十一年限り多妻主義が禁止せられたことや、今尙多妻で居るのは多く禁止令以前の結婚で、此等は知事や市長などいふ公職に就けぬといふことや、現に今の知事カットラー君の兄に當る人は有數の名望家であるが、此の點に於て知事たるを得ぬことや、千八百三十年に始めて此處へ六人で移住した敎徒が今では六十萬に越えたことや、野村の妻君(五)が何處やらで當地の誰彼に會つた時、此の人は幾人、彼の人は何人と、一々妻君の數まで數へて紹介せられたといふことなんど、段々話に花が咲いて、其の中、さう澤山妻君があつては、ミセス何々では通じまいから、第一ミセス何々と一々番號づけにするだらうとか、甲號の女房を呼ぶ積の處へ乙號の女房が出て來たら何うするだらうとか、女房共が亭主の噂をする時「私の夫」とは言はずに「我々の亭主」と言ふだらうかとか、他人の狐氣を頭痛に病むやうな話が追々に出て來た。

餘り遲くなるからといふので、一同腰を上げたのが丁度夜の十二時少し前。店を出ると、宵の中の雨は何時しか雪となつて、之が風に煽られてモルモン宗の紋所を其の儘に卍字巴と降つて居る。(四月六日)

三、我觀ボストン(六)

ボストンに來て見て、初めて氣がせいせいした。

今までは何處に行つても、後から追つ立てられるやうな氣がして堪らなかつた。若夫婦ばかり住んで居る家へ泊り合せた樣に、氣の置ける老人の居ない代りに、何處やら家の引締つた所が見られなかつた。成り上りの金持が又しても初める自分の金儲けの手柄話を聞かせられるやうな心地ばかりした。大きな物、廣い物、長い物、光る物は數限りもなく見せられたが、深さを持つたものは曾て見たことがない。何百萬圓何千萬圓かゝつたといい

ふ家は見たが、此處に誰が住んで居て、どんな時に何なことがあつたといふ由緒のある家は、只の一軒もなかつた。其の之あるは實にボストンを以て初めとする。

凡そ町の樣人の心は、停車場から旅館に行く迄の間に大抵知れる。我等の馬車を見上ぐる人の眼ざし、此方を見やりながら何やらん語り合ふ身振、さては道行く人の歩きぶり、掛聲の模樣、夫や此やを考へ合せて、大抵斯うと見込をつけた見込は、滅多に外れるものでない。ボストンのバックベー停車場に着いて見ると、きよろ〳〵と後から人を突き飛ばして驅けぬけて行く樣な態はない。悠揚として落着いた所がある。旅館に着くと、主人が出て來て丁寧に挨拶する。其の口のきゝやうが既に違ふ。何處と言つて明かに其の點を擧ぐることは難いが、唯何となく整然たる秩序が、人と人との間に立つて居るやうに見える。

ボストンで到着早々見に出かけたのは、米國中で第二と稱せられて八十五萬の書を藏すといふ州立圖書館であつた。一時間に六百頭の豚を殺す器械が二臺あつて、一日に豚ばか

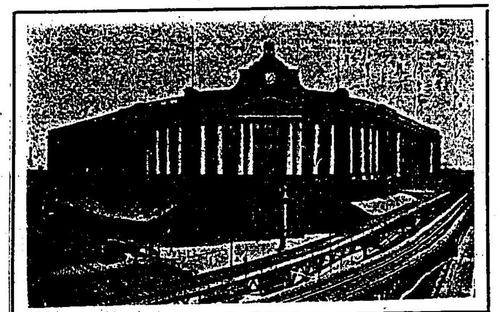
ワシントンが初めて獨立軍の爲に第一令を下したりといふ楡の樹

り平均一萬五千頭を屠るといふ大屠殺場を到着早々觀せられたシカゴとは、大分趣が違ふ。州の元老院議場に行けば、獨立戰爭の初に眞最初の第一砲を發つたといふ銃砲やら、初めて英軍から分取したといふ古い小銃がある。ゲンツブリッヂに行けば、千七百七十五年七月三日華盛頓が初めて其の下で獨立軍の爲に第一令を下したといふ楡の大樹がある。ハーバート大學の構内には、南北戰爭の時に戰死した大學生の爲に建てた壯

麗な堂がある。バンカー、ヒルには有名なバンカー、ヒルの激戰を思ひやるべき長大な記念碑がある。實にもボストンに來て初めて此に歷史ある町を見た。歷史といへば、米國の國祖たるピルグリムが、萬里を遠しとせずして、來つて此に此の新領土を開いた當年清敎徒の元氣は、今も尙此處に橫溢して居る。ボストンに英吉利風の所があるのも、畢竟此の邊の民は盡く純粹の英吉利人の末であるが故だ。

古ぼけた舊跡ばかりがボストンの誇でない。此處に工費二千八百萬圓を費し、七百の列車が日々出入すといふ世界第一の大停車場がある。此處にエールと相列べられるハーバート大學が有つて、其の又分科の、之も世界一と稱せらるゝ工科大學が、ボストン市の眞中に在る。公園をいへば、此處のパーク、ロード、システムは名高いもの、道路を言へば淸淨廣濶、鬱乎たる綠樹之を圍んで、小公園の趣がある。圖書館博物館皆以てボストンの誇とするに足る。

が、ボストンの誇は人に在る。所謂新英蘭の精神の籠つた今のマサチユセッツの民に



ボストンの大停車場

は英人の守成を思ふ心と米人の進取的氣象とを兼ね備へて居る。秩序を重んじ禮讓を尊ぶ所は之を英人より受け、其のばあとして大きい所は之を米人から取つたらしい。此に於て、亞米利亞全國が今に半成品である中に、ボストンばかりはもう立派な既成品に出來上つて仕舞つた。

大森の貝塚發掘を以て聞えたモールス博士とは此處の商業會議所で會し、日本に於けるユニテリアン主義の開拓者として名あるマコーレー博士とはオックスフヨード、ホテルに尋ねて逢つた。モ氏は老いて益壯だが、マ氏は先日脚に大怪我をして今も尙自由に歩行が出來ぬ。二人ながら日本の皆々樣に宜

しくとのことであつた。（四月十五日）

四、マニキユール

惟るに大分頭の毛が延びた。ホテルの地下室に斬髪屋があるといふので、僕は早速行つて見た。

何卒此方へといふので、先づ上着を下剃見たやうな奴に預けて、坐り心地の宜い厚い皮の椅子へ腰を卸すと、刈りませうかお顔だけにしますかと、カイゼル髭を生した背の高い男が、僕の頭と鋏とを七分三分に見下しながら尋ねる。『兩方とも』とえらさうに僕がいふ。

先づ頭から刈り初めた。ちやき〳〵と十分もかゝらぬ内に、何時しか頭の方は濟んで仕舞ふ。日本なら早くて三十分はかゝる所を、亞米利加だけに恐ろしい早い。その代りぞんざいなことも迚も比較にはならぬ。今度は顔を剃りにかゝる。紫色のクリームを頤一面に

ボストンのホテルの前

マニキユール

引いて、忌といふ程刷毛で擦り廻すと、ねつとりとした細い白い泡が顔中一杯になる。時分はよしと幅の廣い剃刀をあてゝ、じゆう〳〵又音をたてながら剃り下す。之は二分間程で濟んだ。世界中何處へ行つても、日本程斬髪の丁寧な所はないが、亞米利加ほど早い所も亦珍らしい。

今度はシャンプーは如何と來た。僕は來たなと思つた。此地では頭を刈るのが幾何、顔剃が幾何と皆別々に金を取る。其の上にシャンプーをやる、シンヂをやる、又顔の電氣マッサージをやると、一つ〳〵に五十仙位宛取つて、總計二弗乃至三弗、日本の金にして五六圓許り瞬く

マニキユール

間に取られる。高いは高いに相違ないが、言葉の分らぬ連中が何を問はれてもうん〳〵と分つた樣な返事をするから、高いのが尙高くなる。別段青くなるほどのことではない。

シャンプーをやらせながら何心なく横を向くと、僕の上着は帽子臺の鈎に懸つてゐる。今日受取つた三百弗餘りの金を其の衣嚢に入れてあることを思ひ出して、何だか氣になる。油斷がならぬ〳〵と思ひながら、屢横目で帽子臺の方を見ると、其の嚢の先に、又小さな部屋が有つて、此處に卓子を中にして、若い高襟式の男が若い美しい女と差向ひで、何やらいちや〳〵と話して居る。男は手を差出す、女は其の手をいぢくり廻す、何だか衣嚢の三百弗よりは此の方が氣にかゝつて來た。「人中でいちや〳〵するのはお止しなさい」とか何とか言つてやりたい。

亞米利加のお洒落がすなるマニキユールとは之だなと思ふ。爪を切る、切跡を磨く、垢を取る、爪の生際の塵を洗つて油を塗る、而して爪には薄い紅色の繪具をつけるのである。

爪の間に黴菌が溜つて夫から樣々の病毒を傳へるといふから、爪の掃除だけなら誠に結構なことだが、由來此のマニキユールといふものは、必ず若い美人がやるに限り、來る奴も來る奴も之にちやほや言はれたさが半分の、氣障な半可通のボンチ風の男許りであるに至つては、そも〳〵聊かむかつく。

元來亞米利加で少し持て囃さるゝ人といへば、ローズヴェルトにしても、タフトにしても、ヒューズにしても、ブライアンにしても、何處にか多少清教徒的の血を受けて居る。酒を飲み煙草を喫ふをさへ遠慮する。佛蘭西人が葡萄酒を飲み、獨逸人が麥酒を傾ける代りに、亞米利加人はたゞの氷水を飲む。若い大學の學生抔は、多く蓬頭亂髪、寒きに外套を着けず、雨ふるに傘をさゝぬ。亞米利加の元氣は實際此處に在りもしたし、又今もあるのだが、今日になつては新英蘭の祖先の遺した此の清教徒的の元氣が、マニキユールなんぐに憂身をやつす新時代の優男の爲に、次第に銷磨せられかゝつて來たのだ。

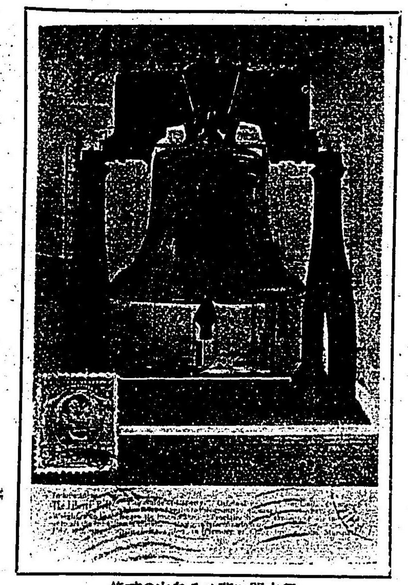
シャンプーも何もかも濟んで仕舞ふと、例の下剃が上着と帽子とを持つて來て、金のほし

さうな顏をして着せてくれる。十仙手の掌へつかませて、傲然として僕は此處を出た。

五、費府の寫眞責め（七）

十二時二十三分に費府に着いて、二時何分だかに出發するといふので、一同大急ぎに獨立閣見物に出かけた。

獨立閣は小さな煉瓦造りの建物で、出來るだけ昔の形を其の儘にしてあるのださうな。此の家の中で米國獨立の宣言が起草せられ、此の家の中で七年に渉る獨立戰爭の間米國の議會が開かれ、此の家の中で千七百九十三年に華盛頓が合衆國眞最初の大統領としての就任式が擧行せられたのだと思ふと、家は古ぼけて小さいものだが、何となく神々しくなつて來る。先づ入口の正面にある小さな室に入ると、此處に例の東海散士の「佳人之奇遇」で名高くなつた自由の破鐘がある。獨立の宣言が發表せられて十三州の合衆國が此に成り立つた時に初めて鳴らしたもので、其の後國家の大事に會する毎に之を打鳴らすを例として



獨立閣に藏せる自由の破鐘

居たのであるが、夫れが千八百三十五年に打破れて、千八百四十三年から全く鳴らなくなつた、と案内記にちやんと書いてある。此の室を一寸出た所に段階子が有つて、其の横の壁にラフワエットとワシントンとヂョーヂ第三世との肖像畫が懸つて居る。米國の獨立戰爭に最も緣固の深い英米佛の三人を取り合せた所は面白いが、何だがヂョーヂ三世には氣の毒なやうな氣がする。入口から向つて左に

我府の寫眞賞め

當る室はイースト、ルームと唱へて、當年米國の政治家が獨立非獨立を討議した跡で、此處に銘々が獨立の宣言に署名した卓子が保存せられて、其の横に當時の署名に使つた大きな背の高いインキ壺がある。灰吹から蛇が出るといふことはあるが、此のインキ壺の中からこそ、今日四十六箇の聯邦を列ねた亞米利加合衆國が出て來たのである。宣言の署名の中にハンチントンといふのがあるが、之は今の國務次官ハンチントン、ウキルスン君の祖先だといふので、先生東京の公使館に居る頃は、能く之を語り出して自慢したものだ。

時間が無いからそこ〳〵に此處を出ると、外面には日本人珍らしさに我等の出て來るのを大勢待つて居る。其の中に新聞記者もあれば、新聞社の寫眞師もゐる。此の寫眞師が附け廻しつ我等を寫さうとする五月蠅さと言つたら話にならぬ。一行中の野村夫人一人が日本服で居るので、前後左右から之を挾み討と出かける。流石の美智子夫人も大に弱つて、人の後物の影へ逃げ廻るが、何處々々迄も尾いて來る。忌がる者を無理無體に寫眞を取らうなどゝは實に失敬極まる。殊にづう〳〵しく人の前に立ちはだかつて、カメラの筒口を向

けるのは如何にも心地の宜いものでない。夫が一人ならまだしも、二人三人一時に押しかけて來るのだから、何としても堪らぬ。僕は遂に堪へ兼ねて、後に美智子夫人を庇ひながら、『其處除け！』と呼はつた。其の見幕に驚いて一時は飛び退いたが、一町程先で又ちやんと待つて居る。又叱る、又飛び退く、而して又先に行つて待つ。斯の如きもの數人數回、は

ては僕が度々の妨害に腹を立てたか、其の中の一人は僕の側へ眼を瞋らして寄つて來て、『君は人を殺すんだな』と言つた。僕も何とか言つてやりたかつたが、哀いかな、英語では、さう直に旨いことは考へつかず、暫く口をもぐ〳〵させた後吃りながら、『ソソ夫れでも女を殺すよりはましだ、』と言つてやつた。

米國の新聞記者の五月蠅さは、實以て愛想が盡きる。停車場へ着くが早いか、待ち構へた四五人が取圍んで何だ彼だと言ふ。此處で要領を得ぬと、ホテル迄尾いて來て中々歸らぬ。甚だしきは人の部屋迄踏込んで來て、悪にもつかぬことを聞く。うッかり何か喋ると、取り圍んだ四五人が銘々手帳を出して、一齊に何か書き留める。翌日になると、話もせぬこ

政府の寫眞賣め

とを書列べたり、會ひもせぬ者が會つた樣に出て居る。怒らうが、怒鳴らうが、平氣の平左で、一旦くつ附いたら、牛虱の樣にくつ附いて、挺でも動くことでない。其の代り暢氣なことも亦暢氣なもので、或時シカゴの某新聞記者といふのが諄々と何か話しかけやうとしたのを、今は忙しいからとて愛想氣もなく斷つたら、夫では何時間待てば宜いかと聞く。何時間と明かには言へぬが二時間も待てば用がすむと答へたら、其まゝ行つて仕舞つた。僕は此の問答をすッかり忘れて仕舞つて、二時間ほど後で、下のホールへ下りると、先生今に待つて居て、僕の顏を見るや否や、『丁度二時間待つて居ました』と莞爾々々しながら寄つて來た。又或時僕の部屋へ來た某新聞の記者を、散々怒らせて追ひ返したことがある。先生ぶり〳〵と出て行つたからよもや二度と來はすまいと思つて居ると、翌日はちやゝんと又ホテルに來て居た。而して僕の顏を見て何を言ふかと思つたら、『又お目にかゝりますな』と、にたり〳〵笑つて居て、昨日のことなどは忘れたやうだ。之には如何な僕も大に參つた。後で聞けば、斯ういふ手合は眞個の新聞記者でなく、其處此處で材料を涉獵つて來て、

は、之を新聞社に賣り附ける立ン坊の類だといふ。新聞記者をさへごろつき商賣と言ひなす世の中に、之は又其の以上にごろついて居るのである。

兎角して我等は無事にコンチネンタル、ホテルに着いた。此處で三十分許りで大急ぎの食事を濟せて、又汽車に乘つたので到頭寫眞の難は免れた。所が其の後紐育迄送つて呉れた其の翌日の費府の新聞を見ると、寫眞一件の腹癒せにとてか、何處の牝馬の骨とも分らぬ日本服の女の寫眞を麗々と掲げて、其の下には、「日本人世界一周團體の花、野村美智子夫人」！

六、リンコルンが家（八）

正午十二時を期して米國議會に集まるといふ約束なので、其の間の時間を利用して先づ久しぶりで國務次官のウキルスン氏を尋ね、夫から直自動車をエフ街十丁目のリンコルン博物館に飛ばせた。同行は土屋大夢和尚（九）と野村美智子夫人。

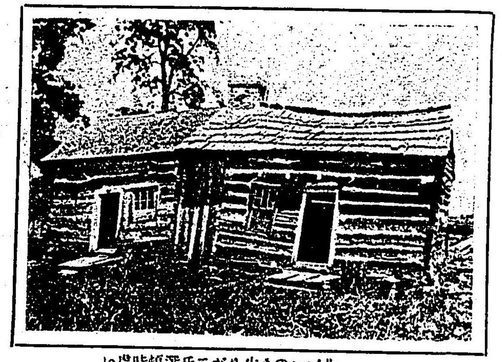
リンコルンが家

途中アブラハム、リンコルンに關する樣々の話頭が出る。

或時何處かの晩餐會に出かけやうとして、旅館の部屋でリンコルン自身其の靴を磨いて居つたことがある。其の時丁度來合せた友人の何某が、此の樣を見て大に驚いて、『卿はまア御自身の靴をお磨きになりますか』と尋ねたら、リンコルンは一向平氣でぢろりと其の人の顏を見上げて、『卿は一體何誰の靴をお磨きになりますか』と問返したといふ。

又リンコルンが大統領候補に立つた時のこと、愈豫選投票が濟んだとの電報が其のスプリングフヰールドの事務所に着いた。之を見て何をいふかと思つたら、『此れを見て喜んで呉る女が一人居る、どれ早く歸つて見せてやりませう』と言つて、其のまゝすたゝ〳〵歸つた。其の女といふのは細君のことだといふ。

人間の性格は驟雨に遭つた時に知れると言つた人があるが、實にも一寸した機會に言つた言葉の中に、却て其の俤を偲ばせることが多い。リンコルンが身を水飲百姓の家から起して、船頭となり、樵夫となり、一轉して辯護士となり、再轉して米國有數の政治家となり、



リンコルンが家

北米の偉人アブラハム、リンコルンは此の見る影もなき酒屋の中に生れたるなり。家は自ら氏が父の自ら建てたる所、氏が大統領に選ばれて華盛頓に赴任せる時に其の母尚此處に住せりといふ。

リンコルンの生家

其の末遂に兇漢の手に倒るゝに至つた五十五年の歴史は、ナポレオンなどのやうに花やかな所はないが、其の代り高い所と暖かい所とがある。クック社のクローソン老人（一〇）が之を古往今來世界第一の人物と敬服して居るのも、萬更贔負の引倒しではない。

兎角する中、其の所謂博物館へ着いた。博物館といふと大きいが、其の實リ氏が劇場で銃擊されて後直ぐ此の家へ擔ぎ込まれて、到頭此處で息を引取つたといふ因緣に依つて、此處にリ氏

リンコルンが家

が遺物を蒐集展覽して、普く故人の德を慕ふ者の縱覽に供して居るのである。館主のオルドロイドといふのは、深くリ氏の高德を慕つて、リ氏が生前から此の種の物を蒐め出し、リ氏永眠の後は自ら此の家に引き籠つて、專ら斯に身を委ねて居るといふ。斯ういふ篤志の人がリ氏の爲に出たといふに察しても、リ氏の爲人が推測られる。

オ氏の懇な案内に依つて、隈なく館内を見廻る。リ氏が幼時に其の名を署した聖書、リ氏が南北戰爭に用ひた軍旗、リ氏が初めて大統領に選ばれて閣員を選定した時に坐つた椅子、リ氏のスプリングフキールドの宅から持つて來た家具、――之は粗末千萬なもので、其の生活の質素で有つたことが思ひやられる。其の外リ氏の肖像畫大小合せて三百餘、リ氏の受けた賞牌徽章の類二百餘、又リ氏に關する傳記其の他の著述一千有餘を藏して居ると、オ氏が說明して呉れた。中にもリ氏が刺客の銃擊を受けた時に被つて居た帽子、其の時腰を掛けて居た椅子、リ氏が最期の息を引取つたといふ寢室、及び其の時に使つた木製の汚ない寢臺など、何れ昔を思はせぬはないが、殊に面白いと思つたのは、兎ある柱に貼りつけ

たリ氏當時の奴隷の相場帳であつた。之は千八百五十七年九月十五日の相場で、之によると、一番高いのが無類飛切上等千四百五十弗から千五百五十弗、一番安いのが身の丈四尺の男兒で、五百弗から五百五十弗、其の外此の二つの間に高下いろ〳〵ある。相場の標準は主として身長に依つたもので、背の高い奴ほど價が高い。だから僕などは慥に千四百弗位にはなるが、大夢和尙や美智子さんなんどは、氣の毒ながら六七百弗にしか賣れまいと、僕は旨いことを考へついた。

リンコルンが家

リ氏の殺された劇場は、其の後病院に成つて、今はない。不祥の事のあつた劇場だけて、形を變へたも尤もである。所がリ氏を殺した兇漢ウキルクス、ブースの兄といふのは、其の頃米國で第一流の俳優で有つたが、此の弑殺以來深く自ら其の同胞の兇行を恥ぢて、竟に一度も足を華盛頓府に踏み入れなかつたといふ。之はオルドロイド君の物語である。

見るだけの物を見了つて此處を出たが、十二時迄にはまだ中々間が有る。此の間にポトマクの方へでも乘り廻さうでないかと言へば、六十年前なら千二三百弗に踏めたらうと思

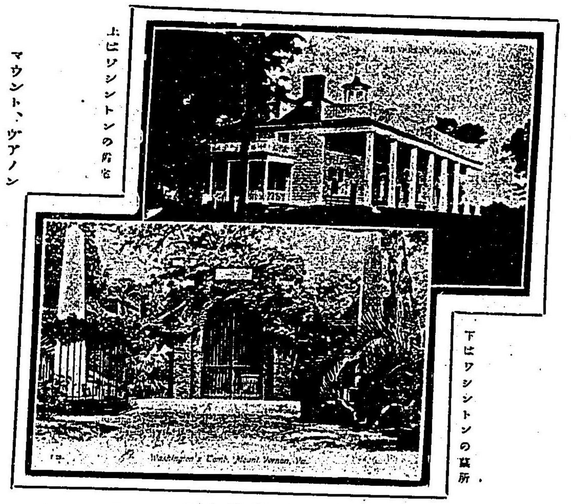
マウント、ヴアノン

はれるほどの大きな御者（シーフリール）が、ぐッと舵機を廻して、我等の自動車は三人合せて三千弗近いお客を載せて、ポトマク河の岸邊へとさし急ぐ。（四月十七日）

七、マウント、ヴアノン（二）（大夢）

僕は曾て三箇月ワシントン府に居つた事がある。けれど繰無うして、マウント、ヴアノン（ヴアノン丘）なる建國英雄の墓をば一回も訪ね無かつた。今度は都合好く見物の日割に入つて居たから、遂に行つて見ることになつた。

有體に言へば、僕はワシントンを好く知らぬ。亞米利加で高名な人の中では、クローソン老爺ぢや無いが、リンコルンが一番好き、其の次にはハミルトンが好きだ。獨立の檄文を草したトーマス、ゼフワソンも英雄だが、フランクリンの方がなんだか有難い、と云つてワシントンも矢張り宜しい。僕は好んで西遊記を讀む。孫悟空が一番好きだが、偖三藏法師は棄られぬ。水滸傳でも林仲晃蓋盧俊義などが好いに極つて居るけれども、宋公明は



上ヒワシントンの墓所

下ヒワシントンの墓所

マウント、ヴアノン

矢張り大將ぢや。それと同じ譯だかどうだか分らぬが、ハミルトン、ゼフワソン豪しと雖も、百世に渡りて崇拜されべきは、どうもワシントンに違ひ無いやうな氣がする、實に妙なものだ。

など〳〵言ふ内早や是れぢや。一行の乘つて居る特別電車二輛ぴたり門前に止つた。朝日新聞世界一周會の赤旗を見ると、何だかけば〳〵しうて恥かしい樣な氣がする。用意の大花束を會

員中の若い衆に持たせて、徐に車から下りた。門を入れば、成程少し爪先上りで小高い丘になつて居る。左に曲ると通路の傍に露店が有る。ワシントン幼時の話に因んだ玩弄の鉞、其の外いろ〳〵の記念品を賣つて居る。會員は早やばら〳〵と驅出してみやげを買はうとする。其等の人々を打棄てゝさつさと進んで行くと、白塗の極質素な家が有る。之れがワシントンの舊宅で、退職後も此の處に住んだと云ふ、さう聞けばなんと無く尊い。

家の周圍に芝生が有る。疎なる樹木の間から向ふの低地が廣く見渡される。天は快晴だ。氣候は寒く無し暑く無し、樹間には何やら鳥が囀つて居る。此の芝生に會員を集め、豫て用意した寫眞師に命じて、花束と共に寫眞を撮つた。僕も此の時ばかりは隨分眞面目な顏付で有つたが、旋毛曲りの楚人冠は何處へ行つたか一向見え無い。此の割當りめと僕は心中に彼を呪うた。

芝生から墓までは極緩やかな傾斜で、二丁ばかりも有る。墓は三方を煉瓦で積上げ、一方に鐵柵を入れた非常に質朴なもので有る。其の中にワシントンと其の夫人の石棺がちやン

と並べて据ゑてある。僕と淸瀬と服部(二)の三人は番人の許しを得て、其の中に入つた。先づ一周會の旗をワシントンの棺にかけ、其の上に花環を載せた。會員一同は恭しく敬禮した。參詣の米人數十人は目を丸くして我々を注視して居た。僕は斯う思うた、此のワシントンの夫人は、若い綺麗な金持の後家さんで有つた、ワシントンは入夫のやうになつて、獨立戰爭前まで其の財産の世話を燒いて居たさうだ。世間普通の例で言へば、何だが意氣地の無いやうな體裁だが、ワシントンの人格は毫も之が爲に下落しない、のみならず其の赫々たる功業は、世人をして此の婚姻につき何等の批評をも下させない。面白い事で有る。然しワシントン程の大人でも、生きて居る內は敵も隨分有つた。其の第二期在職中には、ワシントンは英軍に內應する約束をした事が有ると云うて、證據の手紙まで出して攻擊した者さへも有つた。そんな事を思ふと浮世は實に厭になる。

暫く斯な事を考へて立つて居ると、背後で大きなクローンの聲がする。早くせねばウキルソンの請待(三)に間に合はぬと。それ外しては浮世の義理が濟まぬ、急げ〳〵と早足

に門前へ走る。會員の多數はワシントンの宅を見ねばならねと騷ぐ、クック社のキングが隨いて行つた。僕等は一足お先に失敬と電車に飛乘り、オールライト、ゴーと叫んで車を出させたら、二輛の車にたゝた八人しか乘つて居ない。僕も楚人冠も默つて居る。クローソンも默つて居る。後の方で彼の赤旗が淋しさうにひらり〳〵。（四月十八日）

八、紐育の懷舊（大夢）

僕が紐育を去つたのは明治三十年の八月末で有つた。其の時は筆を持つ商賣人では無い、本當の商賣人で、他の二人の友達にくゝ着いて、紐育の十六丁目に三笑堂と云ふ美術品の店を出して居たのだが、士族の商法形勢面白からず、若干の借金を背負ひつゝ、悄々として四十二丁目の停車場から歸國の途に就いた譯だ。それが今度十年振りで朝日新聞の記者に化け、世界一周會員五十三名を引率し、大手を振つて復び舊戰場に乘込むのだから、若い人なら大に快哉を叫ぶので有らうが、僕も早五十を疾うに越したから、そんな勇氣はち

よつとも無い。今眼前に此の十年間に起つた紐育の變化を眺め、僕の心に想ひ浮べるのは、一昔前に經過した生活難の夢で有る。

明治二十六年にシカゴ大博覽會の有つたのは皆さん御承知の通りで有る。僕は其の時既に日本で一所帶崩した敗軍の弱兵、掌の柔かい勞働者としてシカゴへ行つた。大阪出品協會の書記として委員の下に働いた。ペンと鉛筆とを持つ傍には、鐵槌と釘拔とを振廻し、寄汗を流して百何箇の荷箱を開けた。小車に其の空箱を積んで、三四丁の處を日には幾度も往復した。それで毎日二弗の給料の內から、六箇月の間にやつと百弗ばかり貯蓄した。是れなら紐育に行つて暫くは籠城が出來るだらうと考へ、協會から暇を取つて紐育へ出掛けた。所が全く方角も分らねば勝手も分らぬ。大倹約の積りで一週間二弗五十仙といふけちな部屋を借り、三度の食事は外へ出て喰ふことにしたのは好かつたが、借金の入ること、案の外で、ポッケットから紙入を出す度に氣がひけてどうもならぬ。何でも早く何處かの店に入らねば、遠からぬ內に人間の干物が出來さうに見えた。

紐育の懶惰

其處で僕は歩行き始めた。ブロードウエーの大通を始めとし、何でも日本の品物の有る店を片端から廻つて、斯な人間は要りませぬかと尋ねた。慣れぬ事だから最初は恐々入口の戸を開けて、一寸支配人にお目に懸りたいと云ふと、何ぞ料らん其の店のとッ端に立つて居るのが支配人で、『支配人は己だ、何か用が有るか』なんて言はれて、ぎよつとした事も度々で有つた。然し少しやると、まづ夫には驚かなくなつたが、『お前何が出來る、月給は何程入るのだ』と、聞かれるのには閉口する。もじ〳〵して居ると、『氣の毒だが君に用は無い、忙しいから又お出で、左樣なら』と言つて、先方から戸を開ける、頭を搔いて立出でざるを得ないことになる。まるで乞食のやうだと思ふと、口惜しさが胸迄込み上げて來るのを、是れも一つの修行だと思つて、三日の間試みたが、到る處皆駄目であつた。

其處で一寸氣を換へて、相談がてら或人の所を尋ねたら、其の人の友人で森村組に働いて居る人が僕に會ひ度いとのことだから、行つて見ないかと言ふ。何か口が有るかも知れずと、其の足で其の人の下宿を訪ねたら、大に喜んで接してくれたが、何の大當違ひで、彼

はフエリキス、アドラーと云ふ倫理學者の弟子で、僕と哲學や佛敎の話がしたいと言ふことで有つた、是は案外と思つたものゝ、此方も其の時分は若いから、勿論木の薬天狗のお仲間だ。彼是四時間以上も夢中で喋つて、無遠慮に彼の論鋒を打碎いた。不敵氣が附いて歸らうとすると、此の先生、君は何をして居ると尋ねた。いや實は夫が大問題、斯々の有樣で泣くにも泣かれぬ仕儀だと話すと、彼僕をつく〳〵と見て、君失禮ながら其の衣物で歩行くかと問ふた。恥かしながら此の外に衣物は無いと言ふと、『いかぬ〳〵、ソンな日本仕立の虎の皮見たやうな物を着て歩行いては、ニューヨーカー(紐育人)が對手にするものか、一寸是れを着て見給へ』と言ひつゝ、釘に引かけて有つたモーニングコートを卸し、無理やり僕に着せた。『ヤー君頗る似合ふ、夫ならば大丈夫だ。も一度試みて見給へ』『夫は有難いが、貴君がお困りでせう』『なに僕は森村の椽の下に働く場所がちやんと有る。君は是れから捜さねばならぬ。遠慮無しに持つて行き給へ。』と言つて、僕の古服を新聞紙に裹んで呉れた。僕は其を引抱へて、彼の家を出たが、夜は既に十二時を過ぎ、流石の紐育の町も寂として

紐育の慣癖

居る。仰げば大空に一片の雲も無く、鋭のやうな冬の月は家々の形を黒く地上に印して居る。僕は今でも覺えて居る、ブロードウエー第十丁目の寺の角まですた〳〵歩行いて來たが、不圖考へると感慨に堪へぬ。一面識の人、然も議論して僕に負けた人、森村組の椽の下に働く人、夫が其の一枚の着換を惜氣も無く僕に呉れた。世には親切な人も有るものだ。之に反して僕はどうだ。徒らに長大にして何の藝も無く、異郷に漂泊して人に衣を惠まる、實に愧むべき動物で有る。今此の紙包に古洋服を包み、之を大事さうに抱へて、夜半紐育の町を徘徊する樣を、故舊親戚等に見せたらば何ど思ふで有らうと。幸に傍に人が居なかつたから、僕は大聲を放つて、自ら大馬鹿物と罵しり、思ふ存分涙を流して、獨り憤慨した。

然し、人の好意によつて勇氣は百倍した。翌日からそのモーニングコートを着けて、更に店廻りを初めたが、時の惡かりしか、僕の自ら薦むるに拙なりしか、三十餘軒の店を試みて、遂に一箇所も成功せず、兎角する内事情不案内の爲に不思議な仕事を宛がはれて、非常

な苦しい場合に落入つた。其の時僕の痩せ衰へたる顏を見て涙を流し、『一言も言ひ給ふな、君を殺さぬ事だけは僕が引受けた。』と言つて、死地から救ひ出して呉れたのは、曩に僕をアドラーの弟子に紹介した人で有つた。

此の人々は今皆日本に歸つて居る。僕は又再び此の紐育に來て、此の二友人と共に夜プロードウエーを逍遙し、舊事を談じて相共に一笑せざることを遺憾とする。其處で僕の感慨は一層深からざるを得ない譯で有る。偖凡そ是等の私事は、語るも面ふせ、書くは尙更嗚呼がましい次第で有るが、同行の楚人冠に一寸物語つたら、是非書けと迫つて、どうしても聽かぬ。乃ち汗と共に書くこと如是々〳〵である。

九、盛なる哉紐育（大夢）

四年六箇月の紐育滯在中、僕だつて始終泣いてばかりは居なかつた。ウキリアム、ケー、ヴアンダギルトと同船で倫敦まで遊びに行つた事も有る。日本第一の名醫と間違へられて、

紐育の夜景

七十何人の黒坊を診察してやつた事もある。苦しい事も多かつたが、面白い事も少くは無かつた。兎に角紐育と云へば、何となく僕には懐かしい處である。

その懐かしい紐育に十年振で來て見れば、變つたの變らないのと言つて、實に呆れて物が言へない。其の著るしいものを數へやうなら、第一には下町の繁昌、紐育の町は二百何十丁目まで有るが、十年前に下町と言つたのは十四丁目以下であつたのだ。それが今では四十二丁目以東になつて居る。十年前には、富豪町と稱せらるゝフィフスアベニューなる第五條通抔は、二十三丁目以上に殆ど商店なく、

三十丁目から先になると、所謂ミリオネア（百萬兩分限）の住宅がずらり軒を並べて居つたのだ。然るに近頃は、此の五條通でさへ、四十二丁目邊までは全で店屋ばかりで、富豪の輩は段々商店に追捲られ、ずつと町外れに逃出して仕舞つた。さうすると、其の何十萬何百萬掛つた住宅をごし〳〵取壊して、商店に拵へ直して居る。そんな鹽梅であるから、二十三丁目以下の商店と言つたら、殆ど十年前の一倍の高さに發展して居る。十四丁目以東になると、全で雲を突くやうな家許りだ。前に僕の居た時分には、シカゴの二十二階メソニック、テムプルが亞米利加第一の高い建物であつたが、僕が還ると間もなく、紐育の下町に二十五階が出來た。夫から其の邊の家屋が急に高さを增して、二十五階も今は一向に珍らしく無い。市役所からウヲール町の邊に行くと、軒別二十階位の家がある、其の中にもシンガー、ミシンの建物の如きは四十五六階で、卓然群を拔いて居る。ウヲール町の一端にトリニチーハチャーチと云ふ舊い寺がある。其の尖塔の頂上まで二百七十尺あつて、巍然として高く聳えて居たが、今は四隣の高い建物に挾まれて一寸見えない。日本領事館も此の寺

の近所だが、二十七階の十八階目に二室許り借りて居るのである。一寸考へると氣味の惡い話だが、紐育人は之れにも滿足せず、昨今五十階の家を建築中で有る。

斯う云ふ次第で有るから、其の下町に人の群集すること實に驚くべきもので、さしもに廣い人道も通行が出來ぬ位で有る。在來の電車や高架鐵道では、兎ても此の多數の人間を捌くことが出來ぬから、近來新に地下鐵道を作つたが、其の規模の大なること又驚くべきで有る。倫敦でも巴里でも伯林でも、地下鐵道は單に複線で有るのに、紐育のは其の間に又一つ急行列車を駛らせる爲の複線が有る。此の地下鐵道は市の塵末のブロンクスと言ふ所まで出來て居るが、急行列車で百二十五丁目まで行くに僅十五分ださうな。プラットフォームに立つて急行の通るのを見て居ると、じゃアんと音がして格子のやうなものがしゅッと眼先を通過するばかりで有る。紐育の地盤は大抵岩で有るから、地下線などは兎ても此の次はイースト、リバーの橋で有る。長さ十六町のブルクリン、ブリッヂ（釣橋）を十

年前には世界第一と誇つて居た紐育人は、何時の間にかそれよりも長い鐵橋を同一の河に架し、更に又第三の橋を今架けつゝある。

第三に河底の隧道である。ブルクリンと紐育が合併して、大紐育市となつた爲に、兩市の交通益〻頻繁となり、數十の蒸氣渡船や大鐵橋でも人を運びきれぬと見え、河底に二條の隧道を拵へて、電車を通じて居る。其の外にまだペンシルバニヤ鐵道の隧道と云ふものが、東河と北河に四つも有り、それから又ハドソン河隧道と言ふものも有り、マンハタン鐵道專用の隧道も同じ河に二つ出來る筈で有る。是等は一々皆世界の大工事と稱すべきもので有るのに、紐育人は五つも六つも平氣でやつて居る。畢竟やらねばならぬやうに町が繁昌するからだ。

英吉利好の楚人冠は、シカゴで荒膽を拔かれたのをボストンで少々回復し、頗る喜んで居たが、紐育の景況は更に亦彼を辟易させた。ハドソン河の渡船の甲板にぼんやり立つて頻に考へて居る。『オイどうした』『何ぢやい是れは』『何でも無い紐育だ』『亞米利加人は

馬鹿だなあ』『馬鹿でも此の眞似は出來ぬ』『出來ても此の眞似はせぬ。』何處までも口の減らぬは楚人冠の特色であるが、奴さん紐育には少からず惚いたやうで有つた。

十、水野總領事

『名を聞くよりやがて面影はおし測らるゝ心地するを、見る時は又豫て思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。』と雙が岡の坊主が言つて居る。「紐育駐在帝國總領事水野幸吉君」と名前だけ聞いたら、如何にも高襟風の優男の樣に聞えるが、會つて見ると、さて「豫て思ひつるまゝの顏」ではない。でつぷりと太つた、丸顏の赤ら顏の、餘り恰好のよさゝうにもない八字髭を生した大きな男で、何か喋る時はごつ〳〵した辯で、頻に雄弊を振ふところ、何しても「水野幸吉」といふ姿でない。何方かといふと、其の風彩は紐育式といふよりも、寧ろ前任地の漢口式に近い。初對面早々僕は聊かたぢ〳〵と來た。

初めて會つたのは、僕等の一行が初めて紐育に着いた時である。若くと態々出迎べに來て居られる。初對面の挨拶も極めて無作法に濟んで、頭も格別下げなければ、「御芳名は豫て承り及び」なんぞ素より以てしない。やがて一同打連れて此處を出やうとする時、僕は出口を間違へて飛でもない横道へ入りかけると、先生後から例の大聲を上げて、『オイ〳〵君、そんな所へ行つてはいかん！』僕は思はず震へ上つた。

二度目に會つたのは、僕等が二度目に紐育に着いた其の夜日本倶樂部の晩餐會に招かれた時だ。此の席で領事は主人側を代表して一場の挨拶に及んだが、元來領事などの演說と來ては大抵紋切形の定文句で、殊に歡迎會の席などではお世辭の百萬陀羅を列べるに相場の定つたものと、僕は强て重きを置かなかつた。所が、聞いて居ると挨拶の最中に一周會員の紐育滯在日數の短いのを言ひ出して、滔々と朝日新聞社の惡口を初めた。夫許りなら我慢もなるが、果は八當りに當り散らして、倫敦滯在の日數を長くしたのが分らぬとて、攻擊の餘波を僕の頭に迄飛ばせて來た。僕は大に面喰つた。

其の翌四月二十日には、總領事夫妻から我等一同ヒポドローム座の曲馬式演劇に招かれ

た。之が三度目である。行くと、『朝日新聞主催世界一周會員各位の清福とボン、ボヤジを祈る、水野幸吉同峰子』と表紙に書いた演藝の筋書を一部づゝ呉れた。中には一番目「旅順の戰爭」二番目「園遊會」の脚色の大意を、委しく日本文に書綴つて、奇麗に日本の活字で印刷してある。英語の分らぬ人だちと見て、之を準備した其の用意の周到なのにも驚いたが、其の又書き流した文章の素人らしからぬにも商賣柄尙更驚いた。殊に最後に

『一寸申上げます、此の筋書の筋の通らぬ事おびたゞしい。元來が芝居と云ふのでなくて、大きな事、奇麗なところを御覽に入れるのが主意で、筋なんぞは重きを置かない。登場の人は總勢で五百人、象が十二疋、又冬の景色で湖水總體が氷る所なんぞは、世界を御周りになつても憚りながら此處でなくては見られませぬ。永當〳〵と

今日の主人敬うて申す』

などゝ洒落れのめした所は、一寸一通りの役人には出來ぬと、僕は又參つた。

其の夜は福井三井物産紐育支店長の晩餐會で四度目の見參に入つた。僕は時間に後れて

行つたので、席に着いた時は已に總領事が大氣焰を揚げて居る最中であつた。氣焰といふと、何だかすうとした細い物のやうに聞えるが、水野君のは八方擴がりの矢鱈に廣い焰で、大は獨逸の製造工業や米國の建築事業の眞面目くさつた話から初まつて、小は華盛頓記念碑の段々を倒さに成つて頭で歩き下りた人や、シンガー、ビルヂングの四十何層樓の屋根の旗竿を取代へに行つた人の話迄言つて聞かせた。大久保不二君(一四)の諄々しい質問にも愛想よく返答すれば、外山政藏君(一五)の飛んでもない横鎗にも元氣よく相手になる。紐育に來てまだ二月程にしかならぬといふに、話を聞けば、もう天晴の紐育通になつてゐる。僕は又參つた。

去年倫敦の大使館で初めて參事官の伊集院彦吉君に會つて、其の「豫て思ひつるまゝの顏」でないに驚いたが、其の後三四度會つて話を聞くと、其の武骨な所に頗る優しいなつかしい所のあるのを見出した。今年水野君に會つて又夫れと同じやうな感がする。紐育の演說で、散々朝日新聞の惡口を言つた揚句、『いや併し朝日新聞はえらい』と一轉語を下し

た水野君を眞似て、僕は此に此の文を結ぶ。曰く『いや併し水野君は全くえらい』。

十一、ホテルの消防設備

時は正に夜の十二時、僕等は今紐育のホテル、アストルの六階の廊下の薄暗い所に默然として立つて居る。僕の右の方には高峰博士、左には土屋大夢入道其の外三四人、向つて正面の壁にくつ附いては、當ホテルの夜間主任、孰も互に目を見合せたきり、一語を交へず一指を動かさず、渾身の力を其の雙の利耳に鍾めて、徐に何事かを聞きすますこと一秒二秒三秒、外面には微に電車の走る音が、有るかなきかに聞える。

實は今日高峰博士の案内でビクトリア座を見物した歸途、博士が牡蠣でも食ひに行かうと言ふので、四五人連此處へやつて來て、地下の印度室と唱ふる妙な所で牡蠣やら蟹やらさん〳〵御馳走になつた。西洋の牡蠣は念を入れて作るといふ丈けあつて、日本の野生の奴より除ほど旨いことは、誰も知つて居る所だが、蟹にしても亞米利加には「殼の柔い蟹」

とて爪も足も丸ごと食べる旨い蟹などがある。且酌み且語る中、更に博士の案内で、此の紐育で最新式の設備を整へたホテルの内部を見て廻らうと言ふことになつた。料理室冷藏庫など地下に在るものから初めて、更に事務室電話交換室と次第々々に上に上つて、とう〳〵客室まで見に廻つた。

高峰博士

此處の交換室は、私設の交換室としては米國第一だといふので、機械も餘程新しいのを用ひて居る。僕に二人の交換手で何千とやらの番號を扱ふのださうだ。此の室を初め、事務所と料理部屋との間などにテレオトグラフといふ器械がある。之は電話機と電信機とを兼ねたもので、片方で書いた文字が、あり〳〵と其の文字の通り相手の方の受信機の白紙へ寫る仕組だ。

大夢和尚がすら〳〵と、「大阪朝日新聞土屋元作」と書いたら、間もなく地下室の方から之と同じ〳〵下手な字で書いた紙切が屆けられた。見ると寸分の違もない。之を東京と大阪との間に備へたら、今の樣に、電話を聞いて、速記して、其の上更に之を日本字に書き直す樣な二重三重の手數は省けると、和尚は和尚だけに分り切つたことを感心してゐた。

到頭上り上つて六階に出た。案内に出た夜間主任が、此處でホテルの消防設備を長々と説明する。先づそれ火事といふと、廊下中到る處の壁に取附けて有る小さな傳警標の硝子の蓋を叩き破る。叩き破るが早いか、自動裝置で警報は地下の消防室に傳へられて、此處の半鐘がか〳〵と獨り手に鳴り出す、同時に廊下々々を仕切つた耐火の扉が、すうと自から鎖つて、昇降機がぐうと消防室迄獨で下りる、と見る中に、此處に夜を徹して詰切の消防夫が直ぐ之に乘つて、豫て自動傳警標の報じた某々の場所へ飛んで來る。警を傳へてから消防夫の來る迄に、遲くて三分はかゝらぬ。夫も極めて靜に傳はつて靜にやつて來るのだから、時々火事があつても、其の隣室に居るお客さへ丸で知らずに濟まして仕舞ふことがあるといふ。――斯く語り了つて後、夜間主任は右手に持つた小さな鍵の頭でこつ〳〵と側に在つた傳警標の硝子の蓋を叩き毀した。僕等は息を殺して控へた。

四秒五秒六秒、高峰博士は時計を見つめながら頻に時を數へる。夜間主任は昇降機の方に目を注いで耳を傳警標近くにあてる。一同は面白いやうな、心配なやうな顔をして待つて居る。七秒八秒九秒十秒、博士の時計がぶち〳〵と音を立てゝ次第に進む。僕も時計を出す、大夢和尚も出す、ぶち〳〵と進む時計は二十秒を過ぎ三十秒と經つて、早く一分二十秒となる。『今頃は鐘の鳴つてる最中です』と夜間主任が初めて口を切つた。言未だ終らざるに、ばた〳〵と廊下を驅け來る人の足音、すはこそと一齊に其の方を見やれば、雲を突く許りの大男が六人、銘々消火器片手にふう〳〵と息を切らしながら、宙を飛んで驅けて來る。時計を見ると正しく一分と三十秒。高峰博士は思はず手を拍つた。僕等も之に倣つて手を拍つた。夜間主任は、怪訝な顔して其の前に立ち並んだ六人の消防夫に事情を説明して、厚く其の勞を犒つてやると、六人は一言だも言葉を交へず、其の儘元來し道へと取

つて返す。

いざとて一同踵を昇降機の方へかへせば、成程道に在る廊下々々の仕切の扉は何時の間にか鎖つてある。愈昇降機の前迄着くと、同時にぎいと音して今しも下の方から着いた昇降機の中から、三十恰好の小柄の男が兩手に鑿やら針金やらを持つて飛んで出て來た。之が僕等に目禮してすた〳〵と出て行く後を、夜間主任は見送つて、『あれが今私の毀した硝子を直しに行く大工です』といふ。

餘まり夫から夫へと落なく手順が整つて居るので、何だかちと小癪にさはる。大夢和尚には内々だが、亞米利加といふは忌々しい所ぢやわい。（四月二十一日）

十二、クロースン哲學

話頭が一寸大西洋を飛び越える。

サボイ座のオペラを見た歸途、此處倫敦は夜のピカデリーの人通を、右に避け左に外し

て、僕は今クロースン老人と腕を組み合せながら歩いて行く。やゝ人通の疎らな所で、忽ち三四人の娘が急ぎ足に前から通りかゝる。老人は組み合せた左の腕をぐつと寄せて、僕の右の腕をぐめる。其の顏を見ると、右の眼を瞑つてにたりと笑つて居る。腕を締めて片眼で人の顏を見るのは老人の癖で、『何だ嫌な女が通るでないか』といふ合圖である。女といふは無論それ者だ。少し行くと、恐ろしい太ッちようの、途方もない背の高い女が、摺れ違ひ様一寸僕等の方へ横目を使つて通り過ぎる。老人は又組み合せた腕を搖ぶつて、僕の方を向いて、片眼をつぶる。『青春の男女が互に惚れたとか惚れられたとかいふのは皆一種の劣情さ。戀とか何とかそんな奇麗な者でも何でもない。』とそろ〳〵老人は戀の講釋を歩きながら初めた。『夫婦にしても矢張夫れだ。夫婦の愛なんて大きなことを言つても、若い間は唯もうパッション一つさ。誠の夫婦の愛といふは、二十年三十年と無事に連れ添つて、子供は成人する、夫婦の間に性慾といふものがなくなる、女の方でお洒落をしなけりや棄てらるゝだらうといふ心配が起るでもなく、男の方でもちやほやと御機嫌を取らねば

氣まづくなるといふ虞がなく、同體一心、自分のことは相手の事、夫が妻、妻が夫と、丸で一つになつて仕舞つた時に起るもので、若い身空で性慾の焔が燃えて居る間に、戀の愛のと言つたつて皆嘘の皮だ。此の間の消息はまだ君達にも分るまいね、何です、ヴー、ユー、フォロー、たか？』と、えらく高飛車でやつて來た。

クロースン老人は、子供の時たつた二月學校に通つたことがある切りで、其の以來到頭學校の教育なるものを受けなかつた。學校には行かぬが、六十餘年具に人生の甘酸を嘗め盡した人だけあつて、彼が常識から割出した一種の哲學は、時々えらい問題を持ち出して、自ら之に途方もない解釋を與へる。先づ人生は無色透明でなくてはならぬとか、處世の方針は加算減算の應用で、加はるを見込んで先づ減ずるに在るとか、分つたやうな分らぬ樣なことをいふ。老人は又クリスチアン、サイエンスの信者で、僕が之を坊主が醫者に化けたに過ぎぬと評したのを捉へて、紐育のホテルのバーで大議論を吹きかけられたこともある。

平生落着き拂つて、山が前へ崩れて來ても、いつかな動く氣色も見えぬが、夫で居て時々氣輕に剽輕たことを言つては人を笑はせる。新兵衞君にはブラザー、トッドといふ、大夢和尚にはゼネラルといふ、僕にはマイ、ロードといふ。而して一同は孰も此老人ををちさんと言つて居た。華盛頓に行く時、汽車でニュー、ジャージーのとある小村を通つたら、老人あわてゝ部屋から出て來て、今暫くすると米國中で外に類のない一大壯觀が見えるから、少し居眠などせずに見て居れといふ。何事かと思つて見て居ると、やがて森の中に立つた木造の小さな家が一つ見えた。『あれだ、あれだ、あの家からえらい人物が生れたのだ。』其の名はと聞けばクロースンだとのことだ。シカゴに居る時も、『今日は世界第一の敬愛すべき女から手紙が來た、』といふので、誰かと思つて聞いて見たら、細君のことであつた。人を馬鹿にして居る。

老人は如何にも人好きのする人品のいゝ人だ。眞白な短い髭を生して、柔和な眼つきで、何時も莞爾々々しながら人に話しかける。一寸人の肩を叩いて、左ながら孫に物でも敎へる

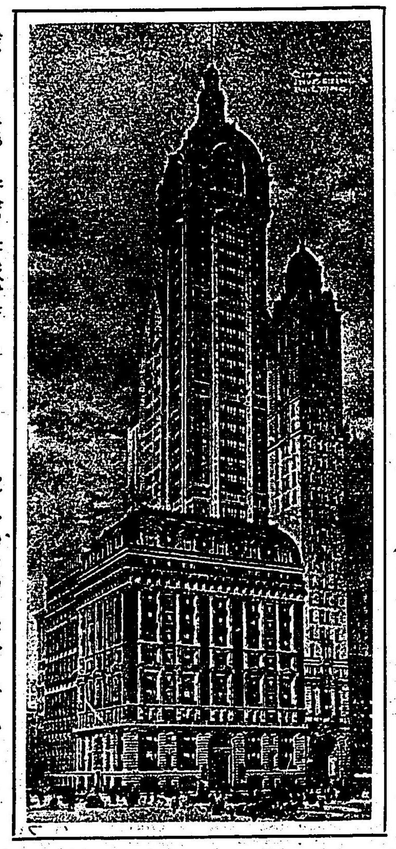
やうな體裁で、眞面目に道化たことを言ふので、此の老人の顏を見ると、少々の心配は有つても沈んで居られなくなる。さうかと思ふと、一方で一行の總指揮者といふ段になると、金の切放れがよくて、部下の者はびし〳〵と遣りつける。部下だけなら宜いが、華盛頓で新聞記者が人の前へ立はだかつて一行の旅行を妨害するとて怒りつけた時などは、隨分手厳しいものであつた。夫れや此れやで老人の人望は非常なもので、初は布哇から紐育迄同行の筈であつたのを、到頭クック社と交渉して倫敦迄連れて來ることになつたのである。

斯くてビカデリーからウエストミンスター迄來る間に、見當り次第にバーへ入つて、ウキスキーをあふること彼此四五軒。老人少し醉が廻つて、今しもオペラで聞いて來た小歌を小聲でやつてゐる、『トララッララア、ラ、ラ、ラア』。

十三、分らぬ亞米利加

西の端の桑港から東の端の紐育迄、一通り亞米利加大陸を横斷して見て、さてつら〳〵

思ひ廻すと、亞米利加といふ所ほど譯の分らぬ所はない。



今の紐育市の最高建築、シンガー、ビルヂング

僕をして試みに多少の手前味噌を担ねしめよ。足を亞米利加の土地に踏み入れたことこ

そ今度が初めてなれ、僕は亞米利加の法樣の下に四年半住んだことがある。其の間東西上下の樣々な人に接觸つて、大凡亞米利加とはどんな所と見當をつけて置いた。教育といふも嗚呼がましいが、僕の受けた曲みなりの教育の大部分は、盡く亞米利加人の立てた學校で受けたもので、隨つて地理歴史は言ふに及ばず、政治外交の大より人情風俗の微に至るまで、亞米利加の事なら何でも少しづゝは心得ざることなしと位に考へて居た。米友協會幾千の會員中、一度も米國に行つたことなくして入會を許すのは、君と誰とかと二人きりだよと、大厨な恩に着せて入會を許された位に、僕は大の亞米利加通であつた、と自分は思つて居た。所が實際來て見ると、丸で見當が附かない。斯なことを言つたら、大夢和尚が乘地になつて「そうれ見ろ」といふに相違ないが、恥も意地も樗はずに腹の底を打破つて白狀すれば、僕は全く「そうれ見」た。

世に調子外れといふことはあるが、夫は外れるべき調子のある上の話で、亞米利加には頭から調子といふものがない。大きいとなると極端に大きい。高いものと云へば途方もなく高

い。和尚のいふ所に據ると、十年前にシカゴの二十四階のメソニック、テムプルが一番高かつたさうなが、今では紐育の四十六階のシンガー、ビルヂングが一番高い。然るに僕等の居る頃丁度建築中であつたメトロポリタン、ビルヂングが四十七階とかあるので、今度は之が一番になるといふ話であつたが、近着の新聞に據れば、イクキタブル生命保險會社は、今度高さ九百尺の六十二階家を建てることになつたとある。此の上何處迄高い物が出來るか知れない。何でも建築學の上からいふと、五階とか六階とか毎に昇降機が一つづゝ要るので、餘り高い家になると、一番下の段は全く昇降機で埋まつて仕舞ふから、如何にスカイスクレーパーだつて、いづれ之を限りといふ時が來るものと、水野總領事の話であつたが、夫迄なるには、未だ何れ程高くなるか知れたものでない。

サレーはジエームス第一世を評して、「最も賢き愚人」といつたが、亞米利加は「最も開化したる未開國」である。千八百三十一年に百人の住民しかなかつたシカゴ村が、今日紐育五百萬の人口に次ぐ大都會になり、紐育十年の變はさしもの大夢和尚を驚かしたのを初

分らぬ亞米利加

めとし、村や町や市や、時々刻々に進み行き、開け來る樣は目苦しい位。新器械が出れば、昨日迄後生大事に構へた工場を惜氣もなく打毀し、新制度を考へつゝと、時を移さず採つて以て自家藥籠中のものとする、今日の新は明日の舊、今年の文明は明年の野蠻となる。何時仕上つて何時固まるといふことを知らぬ。二百年以來未成品の亞米利加は、今も尙未成品の儘で居る。

其の無性矢鱈に廣くて、大きくて、締の有る樣な、無い樣な所は、餘程露西亞に似て居る。露西亞はスラブの作つた亞米利加で、亞米利加はチユートンの建てた露西亞である。唯チユートンだけに、露西亞よりはビジネスライクな組織的な所があるだけだ。露は一國の下に數々の國を集めたが、米は、一の下に數々の民を集めた。露には、二十有餘の異人種があるが、米には、シカゴ許りに一萬人以上の使ふ國語が英語の外に十四種あつて、新聞紙が十箇國の語で發行されて居る。浦潮から莫斯科、彼得堡へと進めば、之でも一箇國かと思ふほど萬事が變つて見えるが、桑港、市俄高、紐育を見た目で、ボストン、費拉府、華盛頓を

見ると、如何に一國民の好尙風儀の違ふかゞ分る。似てると言へば、米國の荒野には、ブレーリー、ドグとて、可愛らしい兎の樣な犬の樣な獸が、鐵道の附近にひよこ〳〵と遊んで居るが、西伯利亞には、タルバガンといふ同じやうな奴が殆ど群を成して居る。尤もタルバガンは非常な毒獸で、一種の臭氣を放ち、之に手を觸るゝ時は、ペストの樣な症狀を起して、往々死に陷るといふ。本文に關係のないことだが、僕は斯なこと迄知つて居るかと言はれたさに、特に此に書いておく。

桑港の繁盛な市街を出て、汽車で半日行くと、人も家もない野原に出る。之が既に我々田舍者には意外だ。すると此の人も家もない荒野が、乘て〻〻願みぬ全くの荒野原かと聞くと、焉んぞ知らん、此處にドライ、フワームと唱ふる一種の農牧の業が行はれて居るのだと、クロースン老人がいふ。電信電話の發達といへば、人は皆米國の盛を推す。然るにシエラ、ネバダの山中で日本へ電報を打たうとすると、もう手續きが分らぬのみか、日本の遞信省から前以て交渉した電信料後納の事がソートレーキの局で承知して呉れぬといふ始末である。

分らぬ亞米利加

見當がつかぬ。

亞米利加とは何な國と問はれた時は、どんなとも返事の出來ぬ國と答へるの外はない。英人の子孫で成つた新英蘭近邊の民と、獨逸伊太利の人が寄り集つた新開地とは、全く性質が違ふ。ピユリタニックな精神の尙廣く存して居た五十年前の米國と、金銀萬能主義の行はるゝ今日の一部の米國人とは、同日に論ずることが出來ぬ。亞米利加最負の大夢の言分にも理窟があれば、市俄高紐育で命を縮めた僕にも一應の道理はある。ローズヴエルトがハリマンと喧嘩するのも、ヒューズがハーストと曲み合ふのも、畢竟は相容れざる米國の異分子の衝突と僕は見た。

斯な分らぬ所よりは今少し分る所へと思つて、此處に此の「北米小景」は大西洋を渉ることゝなる。

大西洋即事

上、無線電信

紐育を船出したのは四月二十三日の午前十一時であつたが、其の夕方大分沖合に乘出して後、紐育の安樂君ここから電信が着いた。見ると、『一行の平安なる航海を祈る』とある。誰に祈つたものだか知らぬが、兎に角彼の信心氣のなさゝうな安樂君が、我等の無事を祈つて呉れたと聞けば、嬉しくもある、ちと又可笑しくもある。安樂君が床の上に跪いて、片手を額にあてゝ、眼を瞑つて、少し頭を下げて、震へ聲で祈つたのか知らんと思ふと、何うやら「アーメン」と言ひたくなる。

迂濶な話だが、此の電信を受取つて見て、初めて、成程海の中でも電信が屆くものだなといふことを思ひ出した。大西洋通ひの大きな船に大抵無線電信の設備のあること位は、萬更知らぬでもなかつたが、唯無線電信の名を聞いた許りでは、何だか藝妓がお客に横目

無線電信

を使ふ位のことゝ解して居て、此方で少し待受氣味で居ればこそぶる〳〵と感じもするが、うかとして居ると、到頭分らずに濟んで仕舞ふものゝやうに、實は心得て居た。所で此奴が通常の電信用紙へ麗々と羅馬字でタイプに取つて、「ヘイ電信」と配達せられた所を見ると、左ながら化物を盥で伏せて、足手を縛つて連れて來たやうな氣がする。實にも藝妓の横目とは、ちいと許り訴訟手續が違ふ。

夫から四日經つて。朝早くクロースン老人に會つたら、船は丁度昨日の夕方から大西洋の眞中に在るのだといふ。早速船長の所へ英米兩地との船の距離を聞きにやつて、『我等は今紐育より千五百五十哩、リバプールより千三百四十哩、恰も大西洋の眞中に在り、云々』といふ電文を書いた。之を船内の電信局に持つて行くと、受附の男が愛想よく微笑みながら、語數を數へ料金を調べた上、四磅六志五片になるが、今二三時間此の邊に通りかゝりの船がないから、少し待つた方が宜からうといふ。斯う沖の方になると、地方を通りかゝつた船を捉へて、之に轉電させるものと見える。斯な應對をするにも、受附は一語一語に

「サー」をつけて、決して五月蠅さうな風はしない。

丁寧なは此の受附ばかりでない。船長事務長を初め、室附の給仕食室の給仕バーの給仕に至る迄悉く夫れだ。殊に室附給仕の世話の行屆くこと〳〵いつたら、迚もモンゴリアの支那人や、日本人とは比べ物にならぬ。僕の船室には、元海軍の水兵でもして居たらしい、人品の宜い、五十恰好の男が附いて居たが、其の言語から動作から一體が蕭然として、之を呼捨にして詰らぬ用を言ひ附けるのは氣の毒な位であつた。僕が一寸でも外へ出て部屋に歸ると、必ず其の留守中に、其處等をちやんと片附けて、引散らしたものは取り揃へてある。幾度出て行つても、行く毎にさうする。小旗を寢臺の上に捨てゝ置けば、何時の間にか窓の上に飾つておく。花束を放り散らして置けば、何處からか花瓶を持つて來て生けておく。朝寢をして食事を一度でも缺くと、御病氣ですかと尋ねに來る。而して暇がある毎に、新兵衛君から書物を借りて行つて讀んで居る。給仕が之では、此方も餘りぞんざいなことが出來なくなつて、僕も何時しか顧みて、追々樣子が改まつた。

無線電信

桑港で僕が電話をかける毎に、蕪丁寧な言葉を使ふとて、清瀬君から笑はれたことがある。又シカゴで或瓩工場の取締役に何か尋ねたら、其の取締役が傍に居る若い男に僕を紹介して、僕のことを言ふに、一々「此奴が」「此奴が」と言つたことを覺えて居る。其の頃には僕も大分米國に化せられて格別氣にとめなかつたが、今此處に來て見て又思ひ出した。

夫から二日經つた。電信局から使者が來て、先日の電報は土耳其(?)の何處とかに故障があつて、其の日直ぐ送れなかつたが、何しやうかと尋ねて來た。仕方がないから、遲くはなつたが、其のまゝ出して呉れと返事する。之が爲に折角の無線電信は、無慘なるかな、四日經つて日本に着いた。

但し、此の無線電信事件以來、電信局の前に日々掲示する料金表には、今まで唯亞米利加と歐羅巴の重なる國々だけの料金を擧げて居たのを改めて、新に日本への料金を加へることになつた。(無線電信の料金は、陸の遠さと行き違ふ船の有無に依つて、殆ど毎日變るのである。)何でもないことではあるが、合衆國、英國とあつて、其の次に「日本」と出て居るのを見ると、何だか大に嬉しかつた。

中、「沈沒」

或夜大夢和尚が大に醉つ拂つて、船内を騷がせたことがある。

大夢和尚が醉つ拂つたと言つたとて、他の者が醉つ拂はなかつたといふ譯でない。今更論理學の講釋を始めるでもあるまいが、「凡ては或物を包含す」といふのが論理の原則である。「或人は死ぬ」といふ命題は、「凡ての人が死ぬ」といふ命題の邪魔にならぬ。大夢といふ或者が醉つ拂つた時、其の實はグロースンなる或者も醉つたし、僕といふ或者も醉つて居た。恐らく彼の晩バーに居た凡ての者が、醉つて居たかも知れぬ。

大西洋に乘り出して見ると、船はモンゴリアより大きいし、食事は三度々々氣の利いた御馳走であるし、我等一同は食堂の中央の最上席を占めたし、天氣はよし、波はなし、其の上バーが廣くて、給仕は叮嚀で行儀が宜い。船室は英吉利一流のアッテンダンスとて、

右の端に立てるは尾上新兵衛久彦君、中に低く坐せるは井上武彦君、左の端に立てるは大土屋元作君なり、今一人は其名を逸す

痒い所に手の屆くほど世話を燒く。何も彼も結構づくめの惡い所なしではあつたが、獨り氣に食はぬのはお客だ。何しろ英吉利行の英吉利の船と云ふので、乘客が多く英吉利人であつたから、孰れもむッつりと掛りかッぱうのない顏をした人ばかり、隨つて乘船早々委員を選んで運動會(二)をやるやうな陽氣なこともなければ、氣輕に講演會音樂會を開いて寄り合ふ折もとんとない。バーに行つても、銘々片隅で、知つた者同志ちび〳〵酒を飲む位のこと、談話をしても高い聲は出さぬ。大凡世に口を利き出せば、

英吉利人ほど、人附合のよい愉快な者はないが、其の口を切る迄と來たら、英吉利人ほど鬱陶しい氣のつまるものはない。

夫が或夜何ういふ拍子か、釋然として雙方解け合つた。何でも晩餐が濟んで、彼此十時半ともなつた頃、クロースンと大夢和尙とバーで酒を飲んで居たのが始まりで、其中に井上禿三郎君(三)が見える、僕が加はる、其處へ米國のシーダー、ラビッツ以來見知り合ひの、シンクレア鑛詰製造所のシンクレア君が交つて來る。緣が夫から夫へと繫がつて、折ふしバーに居合せた英吉利人は、追々に大分一所になつて來た。

『シックス、スコッチ。』クロースン老人が注文する。『サンキュー、サー、』と無闇に「サー」を尻上りにして給仕が持つて來る。老人が金を拂ふ。『ユア、ヘルス。』皆ぐつと飲み干す。『シルクス、アゲン。』大夢和尙が命ずる、和尙が拂ふ。『スリー、スコッチ、ツー、ビネヂクチン、ワン、レモネード。』誰やら又むづかしい注文をする。日本なら差しつ押へつといふ所を、「今度は私が」「いや僕が」と順々に注文して、銘々に金を拂つて、互に健康を飲み

「沈　没」

変はすこと、幾度とも數を知らず。次第に醉の廻るに連れて、議論が出る、冗談が出る、蘇格蘭のお國自慢も出れば、亞米利加の大風呂敷も大分出た。到頭十二時半を過ぎて、バーの電燈を消さるゝ迄飲み續けて、初めて解散したが、大夢和尚の人騷がせは之から初まつた。

和尚は一杯機嫌の足許危く、井上、クロースンを後に從へて、此處を出たが、何と思つたか、急に駆け出して、忽ち船室の廊下を『沈没、沈没』と呼んで歩いた。ぐッすりと寝込んだ所を、「沈没」の聲に起されたのだから、就れも青くなつて飛び出た。尤も此の邊は我が一行五十人の占領した船室許りで、廊下はさながら日本町、何處を叩き起したとて大した間違ひはない。夫が面白いとて、遂には梅原龜七君の部屋迄押掛けて、破れよとばかり船室の戸を叩いて、『沈没々々』と呼はる。梅原君あたふたと寢衣の儘で出て見ると、和尚は酒臭い息をふうと吹いて、『船が沈む〳〵』と又繰返すのだ。後に梅原君の白狀する所によると、一時は眞個と思つて、顔の色まで變へたが、和尚の後に井上君の禿頭が見えたので、「擔ぎよる哩」と思つて胸撫下したといふ。又一方和尚の白狀する所によると、堀、梅原なんど夫婦連で

來たものが、宵の内から船室にもぐり込むとは怪しからぬとて、義憤を起したのだといふ。妙な義憤だとは思ふが暫く「本のマヽ」として後人の考證を待つことゝする。

此の事あつて以來、内外大に打解けて來たが、多くの外人は「沈没」のことを僕と間違へて、僕は屢冷かされるのに閉口した。

㊐、濃霧

愛蘭の沖に差かゝつてから、船は霧の中に封じ籠められるゝこと二日、左ながら拔足差足といつたやうな慎裁で、のそり〳〵と行つて行く。何うかするとぴたりと止まつて、四時間も五時間も動かない。そろ〳〵動き出したと見るうちに、間もなく機關の音がぱつたりと止まる。又動く、又止まる。外面を見れば、一間ばかり先からは、濛々として丸で雲の中を行くやうな。

一分間毎に汽笛が響き渡る。ぐわあんぐわあんと頭の中へめり込んで行く樣な音がする。時々遠

くで汽笛の聲が聞える、右の方にも聞えれば、左の方にも聞える。ひゆう〳〵と細いのは小さい船らしい。大きいのは我等の船と同じやうに、ぶう〳〵と無風流な聲を立てる。忽ち右舷の方に近か〳〵と大きさうな船の音が聞える。海の中に何やら投げ入れる音が、ぶちやん、ぶちやん！つい其處を通るらしい氣色がしたが正體は見えぬ。

甲板に出て見ると、思ひは同じ乘客が、退屈紛れに、見えもせぬ彼方此方を見やつて居る。東を見ても西を見ても、見えさうで居て見えぬ、汽笛の聞える方を向いて、うんと目を剝いて睨んで見るが、矢張り何にもない。笛の音ばかりか、どうやら人聲迄が聞えると思ふ位で居ながら、腹立しいほど目が利かぬ。兎角して物の二十分も甲板の上に立つて居れば、帽子も衣物もじと〳〵になる。褐色に塗つた戸に透して見ると、細かい粉の樣な霧が、風に煽られて、上下に踊つたり跳ねたり、くる〳〵と輪になつて舞つたりして居る。左ながら人を馬鹿にしてるやうな。何處に行つても、手を額にして困つた〳〵といふ人許り、時々に鳴らす汽笛が頭の上から怒鳴りつけるやうなので、上甲板に一番近い喫煙室などは、談話も碌

碌出來ぬ。いつも大繁昌のバーが昨日今日さびれ切つて、火の消えたほどに人聲がしない。

危險が有つてはといふので、船長は一昨日の晩から二日二夜船橋に上つた切り、今に下りて來ぬといふ。下甲板の例の電信局の前には、陸地に近づいたことゝて、諸方から着いた無線電信が、小旗のやうにちら〳〵と貼りつけられてある。英國の水雷艇が沈んだことやら、佛蘭西の海岸で船が衝突したことやら、氣になるやうな電報ばかり。中には廉洛哥の正王アブダル、アジズと僭王ムライ、ハフキッドとが孰もフエズに向つたといふ報道もある。其の外英國皇帝が何したとか、亞米利加の大統領が斯したとか、下手な新聞ほどいろんなことが載つて居る。海の眞中に居つても、矢張り浮世だ。「栖せで尙山深く分け入らん」とある、西行法師も海の中ではだめと心得て御座つたらしい。

二日目の午後、がらり〳〵と氣の乘らぬ機關の音を立てゝ、のろ〳〵動いて居た船は、氣たたましい笛を勢ひ强くぶう〳〵と吹いて、忽ち物におびえたやうにぐうと後退りをした。甲板の上には俄にがやつく人の聲、すは事と許りに飛び出ると、正面少し左舷に寄つた所

濃霧

で、汽笛の絶間に人の話聲笑聲が手に取るやうに耳に入る。聞けば、今しも英吉利の方から、笛も鳴さず、霧中を進行して來た船があつて、ひた〳〵と近づく迄は、雙方共に丸で分らず、あはや衝突と見て、とつかは船は却進を初めたのだといふ。孰れも今少しでえらい事になつた所と、青くなつて居る。話聲笑聲はまだつい其處に聞えて居るが、船體は何しても分らぬ。殊に甲走つた女の笑ふ聲が一段高く聞える時などは、何だか先方からは、此方が見えて、我等の圓栗眼を見張つた所を見て、笑つて居る樣な氣がする。

舷を見下せば、今日に限つて、水の色も青からず、霧がもや〳〵と湯氣の樣に水の中から立騰るやうに見える、何時迄斯うして居ることかと心細い。（五月一日）

夫婦は時々喧嘩せざるべからず。夫婦喧嘩は雨が大氣中の塵埃を洗ひ落すに似て、一時家庭を翳然たらしむる効能あり。毎日續きても困れども、時々ロ之あるを宜しとす。――七花八裂

後の倫敦

一、倫敦の新聞記者

汽船セドリックが二日間の濃霧に閉ぢ籠められて後、漸くリバプールに着くと、「タイムス」と「メール」とから電報が來て居る。「タイムス」のは、單に一周會の趣意と經過とを、月曜日迄に送つて呉れとの注文であるが、「メール」の方は、社説欄の頁に載せるのだから、旅行中の感想を約千四百語の文に綴つて送れとの頼である。千四百語は聊か懲いた。又しても困つたことが起つたと思ひながら、兎も角と波止場へ出たら、「メール」社からはコリー君が態々此處迄出迎に來て居て、昨日社から電報を打つて置いたが、忙しい折とて若し筆を執る間がないかも知れぬと思つて、念の爲に出かけて來た。倫敦へ行く迄の汽車中で、私が筆記するから、態々書いて貰ふには及ばぬとの話である。僕は助かつたと思ふと同時に、流石に「メール」はえらいと思つた。新聞記者が態々二百哩以上も出迎に來たのは、紐育

倫敦の新聞記者

「タイムス」のウキリヤム君がボストンまで來たのと、今度のコリー君と、前後唯二回あるばかり、而して二人とも社では相當の地位に在る人で、コリー君の如きは巴里發行の「デーリー、メール」の主筆記者である。陣笠を寄越さなかつた用意のほども見える。斯くて、車中でコ君は僕の出任せに喋つたのを書取つて呉れた。だから「メール」に出た僕の投書なるものは、殆ど全くコリー君の手に成つたのであることを此に白狀しておく。「タイムス」の方はさう手輕に行かなかつた。電報一つ打つたきりで濟し返つて居る。「タイムス」と朝日新聞社との特別の關係があるにも因るだらうが、「メール」と「タイムス」と、やり口の相違が此の一事でも知れる。

リバプール發の別仕立汽車が倫敦のセント、パンクラス停車場に着くと、僕はばら〳〵と「ポースト」「クロニクル」「エキスプレッス」「ミロア」などの記者に取り圍まれた。彼一語此一句、頻に一周會のことを尋ねるが、氣のせいか米國程に五月蠅くない。頓て寫眞師が三四人見えた。一々寫して差支あるまいかと聞いた上でなければ寫さぬ。寫した上は丁寧に帽子を取つて、「有り難う」と禮を言つて退く。突然カメラの筒口を差向けて、忌應なしに寫して仕舞ふ米國の寫眞師とは、同日の談でない。之には如何な米國好の大夢和尚さへ一言もなかつた。

つい十箇月前に此處を出たゞけの所さて、倫敦に來て見ると、左ながら宅へ歸つた樣な氣がして、嬉しくて〳〵堪らぬ。『何だそは〳〵して』と岡燒半分に新兵衞君に冷かされたことも一度や二度でない。何は然れ、去年以來の舊知の消息を知りたいと思つて、『此の中に「トリビューン」の方は居ませんか』と、僕は取り圍んだ新聞記者達に聞いて見る。『あれはもう死んだ』と「クロニクル」のロワン君がいつた。皆どつと笑つた。仔細を聞けば、二箇月程前に倒れたのださうな。夫れにしても、僕が日本を出る少し前、ロートン君こから、自身夜の編輯主任になつたことや、其の外社内の變つた模樣をこま〳〵報せて來た時は、兎の毛のさき程もそんな樣子は見えなかつたが、測られぬは人の命ばかりでないと思つた。ロートン君や例の左手で原稿を書くベビアット君などは何したらうか、聞いて見ても、

倫敦の新聞記者

誰も知る人がなかつた。

『君を尋ねて居る人がある』と、突然後から呼ばる人があつた。ふり向く拍子に顔を見合せたのは、見上ぐる許り脊の高い例のデビス老人三だ。老人は態々二三日前レミントンから出掛けて來て、待つて居たのだといふ。僕は此の何時に變らぬ好意に感じて、急に胸が一杯になつて、手を握つた切り一語も出なかつた。實は今日レスターを通る時、去年通つた途ではあるし、此處から下りてレミントン迄押掛けたら、老人嘸驚くことだらうと思つて居たが、焉んぞ知らん、老人は先手を越して、却つて僕を此處に驚かしたのである。「トリビユーン」の訃に接して聊か氣を腐らした僕は、此の老人の顔を見るに及んで、俄に元氣を復した。

いそ〳〵と馬車に乘つて、ウエスミンスターなるホテルに向つた。うら〳〵と春の日影の長閑なオックスフォード街の雜沓を通り貫けて行くと、見覺えのある店や看板が其處此處に見える。（五月二日）

倫敦の舊識

二、倫敦の舊識

倫敦のホテルに着いて衣物を着かへると、もう一刻もぢつとして居れない。早速地下鐵道でグロスターロード迄出かけて、「タイムス」のスコット君の家を尋ねた。見覺えのある前齒の大きな可愛らしい女中がにいと笑つて、主人は今卿と行違ひにホテルへ尋ねて行かれたが、奥樣はお宅だといふ。『私をまだ記えて居るか』と聞いたら、又例の大きな前齒を出して、物も言はずにいと笑ふ。間もなく細君が出て來た。細君の妹といふのも出て來た。『あゝらまア お珍らしい』と言つて、手を握つて、『早いもンですねえ、もう一年立ちましたかねえ』と、頻に感心して居る。如何にも一年は正に經つて居るに相違ない。『去年お分れ申す時、來年は屹度來ると仰しやつたけれど、まア何時のことだかと思つて居ましたよ。夫からまア 私達は何をしたでせう。ウヲルター（スコット君の名）が大病で、三月患らつて、夫が直つて、一寸海邊へ轉地に行つた位のことぎりで、其の外にとては丸で何をして

たか覺えても居りません間に、卿はもう日本に行つて、半年逗留して、又くるッと世界を一回りして、歸つて入らしッたのネ。』成程、英吉利の人から見ると、日本に行つて、半年程逗留して、歸つて來たことになる。又倫敦を起點と見れば、僕は丁度今此處で、初めて世界を一周して仕舞つたことにもなる。自己中心主義の英吉利人の言ひさうな所だ。

スコット君

細君は「女どものいふべきことではないが」との前置で、「タイムス」社の改革一件やら、例のスコット君の病氣のことやら、米國の排日熱やら、英佛博覽會やら、世界中に行き渉つた話頭を、夫れから夫れへと語り出す。思へば去年此處で晩餐の御馳走になつた時、談が婦人參政權に及んで、

婦人が男子同樣に課稅せらるゝ以上は、之に參政權を與へぬといふ理窟はないが、併し與へぬからとて、婦人がじや〳〵ばり出て、騷々しい參政權運動などを初めるのは、畢竟婦人の淑德といふことを解せぬからだと、此の細君の滔々と辯じ立てたことを覺えて居る。細君は今日會つても、當年の元氣更に失せずに居る。先は祝着の至りである。

此處でお茶を饗ばれて、歸途に南ケンジントンの去年の下宿を尋ねて見た。女中も給仕も其の外知つた顏は皆代つて仕舞つて、去年居た腋臭くさいハウスキーパーも居らなかつたが、主婦は僕が來たと聞いて、二階から一歩毎に「バイ、ゴッド」「バイ、ゴッド」を口にしながら、飛び下りて來た。夫から去年一所に居たお客の話が初まつて、ミンクの娘が結婚したとか、ハラース大尉は夫切來ないとか、女中のベチーは逃げたとか、蓄音機は何したとか、朝日新聞特派員の資格で聞いては一向面白くないが、去年二月此處に居た下宿人の一人として聞けば極めて面白いことを大分聞いた。夕方には親父も歸るから、是非今日は一所に晩餐を食べて行けとの强ての勸めを、强て斷つて、此處を出た。

倫敦の舊識

此の家の側に小さな煙草屋がある。去年は殆ど毎日通つたものだが、念の爲に一寸入つて見ると、皺枯聲の佛蘭西の細い女は居なくなつて、其の代り白粉をベッとりと塗つた若い美人が來て居る。夫からナイッブリッヂへ出る通の帽子屋へ一寸寄つて見たら、此處の親父も僕を記えて居て、顏を見るなり、「バイ、ゴッド」と來た。基督敎國だけに帽子屋の親父迄が神の實在を會得して居るものと見える。——之は此の日のことでないが、或時タイムス、ブック倶樂部に出かけたら、何時も僕の名をさも言惡さうに發音した案內所のベンダー夫人が僕を一目見て、『あらまだ居しッたの』と聞いた。ベンダー夫人殿、僕を去年からずッと其の儘居る者と思つたのであつた。

遲くなつてはと思つて、急に馬車を雇つてホテルに向つたが、丁度グキン、アンス、ゲートの角で、ばつたりスコット君と行會つた。成程世間は廣い樣で狹い。銀座通を歩いて、誰一人知つたものに會はぬこともあるかと思へば、一萬哩近く故鄕を距てた倫敦の町の眞中で、斯うばッたりと友人に邂逅すこともある。

三、ウエストミンスター懷古

ホテルがウエストミンスターに在つたので、つい一足踏み出せば、ウエストミンスター、アベが直ぐ目の前に現はれる。アベを通り越すと、巍然たるゴシック風の英國議會の前へ出る。之から少し北に向へば、此の邊はホワイトホールとて、宏莊な政府の諸官衙が甍を列べ軒を接して、其の橫にはバッキンガム宮が立つてゐる。右の方には滔々たるテムスの流。之に架け渡したウエストミンスター橋の彼方には、ニューイントンの町々。岸邊に立つたセント、ジエームス病院の幅の廣い建物が臟げに見える。流石に何處とやら英吉利一國の首府たる、ウエストミンスター市の俤が偲ばれる。

一寸羅馬時代の英吉利に立歸つて見る。其の頃、今の倫敦市はアウグスタ市と唱へられて、城壁堅固に結ひ周らし、ラッドゲート、ムーアゲート、ビリングスゲートなどいふ城門が、處々に儼しく立つて居た。今の倫敦の人馬絡繹たるテムスの河の南北兩岸は、唯一

ウエストミンスター懐古

面の茫々たる沼澤の類であつて、潮の滿干に依つては、湖ともなり、磧ともなり、其の間にウエストボーン川（今のハイド、パークのサーペンタイン湖）メリルボーン川、ホルボーン川（今のフリート街の埋設下水）ワルブルック川などの川々も流れて居れば、チエルシー、バターシー、バーモントシーなどいふ島々も彼方此方に在つた。

今のウエストミンスターは、ソーニーと唱へたテムス低地の小島であつた。「ソーン」は「荊」、「イー」は「島」の義といふ所から考へると、何でも荊棘參差たるうすら淋しい所であつたに相違ない。彼のデーンスのカニユート王が侍臣の言葉を眞に受けて、波打際で寄せ來る波を叱りつけたが、波は一向平氣で王の衣物へざんぶりと懸つた時、王は『天上天下其の命の從はれざるものなきは唯上帝あるのみ。』と悟つて、散々侍臣を叱りつけたといふ有名な話があるが、其の水を被つたのは、サウスハムプトンの海岸だともいふし、又一には此ウエストミンスターの波打際であつたといふ說もあると、メークルジョーンの倫敦史に書いてある。づッと下つて、ヘンリー八世の時に、『ウエストミンスターの森林に於て兎

雉、鳩、鷺の類を捕獲すべからず』との、禁令が出た所から見ても、此處には三四百年前迄、まだ〳〵斯な物が住んで居たらしい。

今から凡そ千年前、即ち紀元九百年代の中頃に、國王エドガーが初めて今のアベの前身となつた、セント、ピーター寺院を此處に立てた。之をウエストミンスターと唱ふるのは、セント、パウル寺院をイーストミンスターと唱へたのに對稱したのだといふ。お東樣お西樣と言ふものでもあらうか。此のアベが立つてから、其の周圍に段々家が出來て、之が抑もウエストミンスター市の土臺となつた。

エドガーは、倫敦市からケンジントンに至る一帶の地、東はテムブル、バーに初まつて西はハイド、パークに至る間を、アベの寺領に寄進した。其れ以來此の廣大な寺領はアベの長老の支配する所となつて、長老自ら然るべき下役人を任命して、全く倫敦市とは獨立した政治を行つたのである。之を市と唱ふるに至つたのは、亂暴なヘンリー第八世の時に初まるので、ヘンリーは例の薔薇退治をやつた結果、此處の寺領を取上げて、之を市に編成し

たのから初まる。尤も此の市制は僅か十年しか續かなかつたが、市の名目は今に至つても存して居る。若し夫れ、其の「存して居る」といふことを言立てるなら、今のウエストミンスターも名目だけは寺領であつて、今日尙依然としてアベの管下に屬し、千餘年前の官制は今も其の儘に遺つて居るのである。

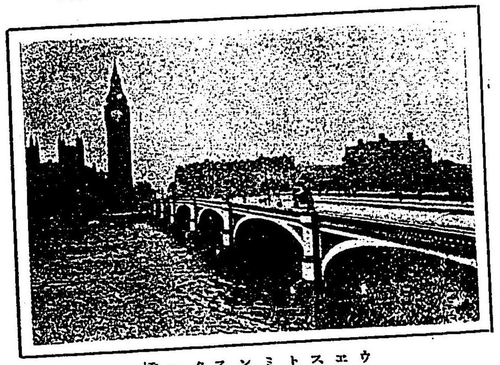
ノルマン征服の後、ウキリヤムがアベの中で戴冠式を擧げた以來、世々の即位式は此處で行はれた。其の中、王宮が出來る、議會が出來る、諸官省が出來る、裁判所が出來て、何時しか、英吉利一國の首府は倫敦市からウエストミンスター市に移つて仕舞つて、倫敦市が一個商工業の中心地となつたと同じく、此處は政治の中心となつた。今でこそ、此の兩個の市は大倫敦の中に引包まれて、「兩個の市」といふも可笑しい位に、家續き町續きになつて居るが、中世から近世の初めにかけては、其の間にぬかるみの泥々道が大通として一本有つたきりで、今のチエアリング、クロース、即ち其の頃のチエアリング村邊には、始終追剝が出たといふ。だから其の頃兩市の往復は皆テムスの流れに依つたもので、エリザベス女王

が船でグリーニッチからウエストミンスターに通はれたことは、スコットの小説などに屢出て見える。

斯う書いて來ると、勢ひ少し倫敦の講釋をして見たくなつて來る。そんなことは聞くに及ばぬと言ふ人があるなら、遠慮には及ばぬ、横を向いて居れ！　不意に呼び立てゝ、人差指で頰をつゝ突く樣な、そんなその半妓のするやうな惡戲をする者でない。

先づ倫敦といふに二種ある。今日倫敦、巴里と相列べて、倫敦と稱する例の人口六百萬のテムス兩岸の大都市と、所謂倫敦市と稱する倫敦とは、倫敦が違ふ。――これ、横を向いて居れといふに！

倫敦市といふのは羅馬時代の「アウグスタ」市のことで、大きさは今のハイド、パーク程しかない。（大きさ許りか形迄似て居るさうな。）此處に倫敦の港がある、稅關がある、英蘭銀行がある、取引所があつて、世界商業の中心となつて居る。此處の住民の數といへば、僅に二萬六千許りしかないが、昼間になると、八方から通ひ來る人の數で、精確には分らぬ



ウエストミンスター橋
（正面は英國議會）

ウエストミンスター懐古

が、慥に一百萬人以上にはなる。此の小區域の倫敦市が一個の獨立した自治體であつて、此處に市長も、市參事會も、市會もある。有名な倫敦市長といふのも、唯是れ此の倫敦市の市長たるに過ぎぬ。昨年伏見宮殿下をギルドホールに招じて歡迎の盛式を擧げたのも、亦此の倫敦市である。

昔は此の倫敦市が即ち倫敦であつた。所が、其の後商業上政治上の發達に伴つて、丁度ウエストミンスターが市外に出來た樣に、次第に市外に町が出來た。グリーニッチが出來る、サウスワークが出來る、チェアリング村が開ける、

ケンジントンが町になる、其の中には、ウエストミンスターの樣に一個の寺領とあつて、寺の長老が一手に行政權を取つたのも有れば、一町全體が大きな大名一人の所有地であつて、其の大名が勝手に吏員を任命して、其の地を治めたのもある。又中には、純然たる一種の自治政を施行して、市長助役以下夫々の吏員を公選したのもないではない。斯く其の町町の政體(?)は、町々思ひ〳〵に種々雜多では有つたが、此等の町々が倫敦市と全く無關係で、倫敦市長の權力が其の孰にも及ぶことの出來なかつたのに至つては、則ち一であつた。

此に於て、倫敦市の外に、倫敦市よりも幾十倍大きな倫敦なるものが出來て、世間から倫敦〳〵と一掴みに言はる樣になつたが、此の大きな倫敦には、長い間政治上の中心といふものがなかつた。夫で倫敦といふのは、倫敦市を初め二十有餘の獨立した市町村が、唯ばつと界を接して寄り集つたぶけのもので、丁度聯邦組織の出來る前、獨逸國内の王公國が勝手に割據したのと、全く同じ體裁であつた。

こゝらが英吉利一流の、古い制度に一種の骨董趣味を持つた所で、之が亞米利加か獨逸か

ウエストミンスター懐古

ウエストミンスター懐古

日本であつたら、早く既に此等の市町村を倫敦市に編入するか、又は此等を盡く引綱めて、大倫敦市とか何とか、大きな自治體に編成して仕舞つたに相違ない。夫れを何時迄も昔の儘に打棄て置いて、如何にも不便で堪らなくなつて、初めて此に今の倫敦の政治上の中心を作つたのは、今を距ること僅に二十年前の千八百八十八年であつた。此の時になつて、初めて、倫敦全體を包括して、倫敦郡と稱するものが出來、此處に又カウンチー議會が出來て、其の議長が倫敦全部の行政長官を承ることになつたのである。

夫から千八百九十九年、丁度今から十年前になつて、更に倫敦市以外の倫敦の町々を二十八區の自治體に割り當て、各區夫々に市長を選擧し、參事會を設き、市會を開き、區稅の賦課徴收も行へば、一區一名づゝの國會議員を選出し得ることになつた。

斯くて我が親愛なるウエストミンスター市は、千五百四十七年以來議員選出の權を持つたきりで、永く名目だけの市たるに留まつて居つたが、此の年初めて獨立したる眞個の市となつて、ウエストミンスター市長などいふ仰々しい者が出ることに出世した。

四、後の「ミカド」

倫敦に着く前汽車の中で聞くと、樂劇「ミカド」は興行禁止を解かれて、昨今現にサボイ座で盛に行つて居るとのことだ。僕は之を聞いて、我れ知らず萬歳を唱へた。其の夜早速クロースン老人と外二三人を引張り出して行つて見た。クロースン老人がバーに四軒も寄つたのは、此の時の歸途である。

去年伏見遣英大使宮殿下が御着英になる少し前、「ミカド」は宮内省から興行禁止の命を受けて、之が爲に一時英吉利中の大問題になつたことがある。何でも殿下への御遠慮といふ意味で有つたさうだが、英吉利で初めて出來て初めて成功した樂劇のことゝて、之をむざ〳〵禁止するとは怪しからぬといふ攻撃が大分喧しかつた。新聞紙といふ新聞紙は、殆ど毎日之に關する非難の聲を揭げざるはなく、はては到頭議會の質問に迄上つた。餘りの騒ぎに僕も一度は見たくて堪らず、倫敦では到底望みがないから、態々百六十哩を北に上

つて、シエフキールド(四)迄見に出かけたことがある。――夫が今晩倫敦に着くなり見られたのだから、愉快で堪らぬ。

筋を云へば、巫山戯切つた道化芝居の類であるから、見る人が見たら、詰らぬメロドラマと一口に言ひなすかも知れぬ。が併し僕には頗る面白い。コ、といふ男が自分の惚れた女を人に奪れて置いて、夫れが他し男とふざけるのを見て口惜しがる所も宜いが、ブーバーといふ大きな奴が、眞面目くさつてヤムヤムを冷かす所も亦甚だ可笑しい。歌は第一幕の最初の合唱「我等日本の旦那で御座る」から、「宮さん〳〵」から、「斯く情ある大君は」から、「ウキロー、チツトウキロー」なんど取り〴〵に面白い。殊にナンキプーの處刑の模樣をミカドに奏上する「囚人は泣き崩折れぬ」の三人の獨唱は、僕の大好きな所だ。

所で、幕毎に舞臺の左の端に、屢出て來る若い美しい女がある。何だか見覺えのある氣がする。能く見ると、去年シエフキールドでヤムヤムに扮した奴だ。回顧すれば、彼の夜芝居が終て〻後、取締役のベラミー君の部屋で、盛に「日英同盟」の祝杯を擧げた時、僕はうかとべ君に唆かされて、態々ヤムヤムを呼んで來て、之に三味線を引く手つきを敎へた覺えがある。今此の舞臺に出現する所の女性は、正しく其の女である。今日は前日の飯を盛るやうな手付を改めて、ちやんと正當に三味線を引いてゐる。之を見ると、ベラミー君の大きな顏が目の前にちらつく。

翌朝「ミロア」の記者が來て、何か面白い材料があるまいかといふので、此の事を話したら、早速其の翌五月四日の新聞に出た。其の翌々六日になつて、サボイ座の座主ドイリーカート夫人から手紙が來て、去年サボイ、ホテルで會つた時の事を、まだ記えて居るといふ話から、件の女はクラ、、ダウといふ名であること、三味線の持方が直つたと聞くのは嬉しいといふことなど、書いて來て、いづれ本人にも其の由語り聞かせる積とあつた。

越えて六日又手紙が來た。先づ『前日クラ、、ダウと言つたのは、メーベル、グラハムの間違であつた』とある。斯んな些細な間違でも、間違と知つたら、棄て置かずに直正して

後のスタインバーグ老

來る心掛は大にゆかしい。而して最後に、『ベラミー君は今丁度倫敦の方の取締を勤めて居るので、早速此の事を話したら、ぺ君は能く去年の事を記えて居て、是非一度會ひたいから、何時でも芝居へ來て呉れたら、最上の席を明けて待つて居る。』とあつた。

惜むらくは、僕が巴里に着いてから、此の書面を受け取つたのである。

五、後のスタインバーグ老（六）

僕は大の自然主義者である。僕は文明の虚飾、道徳の偽善に愛想を盡し切つて居る。世が開けるといふは、畢竟偽つきの段々多くなることで、德が進むと申すは、唯猫を被ることの上手になるのを言ふのだ。人々具足し個々圓成する底の本來の面目に、泥を塗り垢をつけて、夫で發達のと進歩のとはちやンちやら可笑しい。「自然に歸れ」とはルーソー以來の通語で、病氣を直すのは空氣と日光とに限り、物を食ふなら作身か大根下しに止めをさす。如何に料理に料理を重ねたとて、自然の味に一毫を増し一莖を減じ得るものでない。

と言ふ樣なことを考へて居るが、偖食つて見ると、矢張上手に料理したものは旨かつた。抑〻今度の世界一周中に、僕が成程御馳走は旨いと思つたことが前後四度ある。一つは米國でシカゴ西北線の社用食堂車で饗れた中食、一つは華盛頓で國務次官に招かれた時の午餐、一つは彼得堡の外務書記官ワズニエセンスキ君と共にした晩餐で、今一つは倫敦のスタインバーグ老人の宅で饗れた晩餐で有つた。其の以來、僕はもう自然主義を已めやうか知らと考へて居る。

野村美智子夫人

後のスタインバーグ老

去年日本協會で識合になつたスタインバーグ老人は、新聞で僕の來たのを聞いたとかで、早速晩餐の案内を寄越して呉れた。期に至つて、僕は野村美智子夫人を促して一所に出掛

けて見ると、老人非常に喜んで、態々戸口まで出迎へて、能く來た〳〵を繰返す。座敷に入れば、叢々とお客はもう揃つて居て、老人は一々之に紹介して呉れる。一應の挨拶がすむや否や、紹介された婦人客は孰も申し合せたやうに、美智子さんの日本服に目を止めて、態々側近く寄つて來て、美しいとか可愛いとか言つて賞め立てる。

此の夜は主客合せて十六人。言ふ迄もなく男女半々である。私宅で十六人のお客は中々の大宴會だ。老人を初め、姉さんも妹も去年の儘で變らぬが、お客は去年と丸で違ふ。見渡せば、孰も年配の人許りで、僕等が一番若い。中にボールトン夫人とて、六十を越えたらうと思はれる可愛らしいお婆さんがある。自然主義の筆法ではないが、丸々と太つた白い美しい胸を殆ど乳の邊まで露して、頸には大粒な金剛石を三四十も聯ねた頸飾を卷いてある。夫が電燈の光に映つてきら〳〵と光るのが如何にも奇麗な。人の宜さうな目付をして、笑ふ毎に深い靨が兩方の頬に入る。美智子夫人俄にサムライ商會の女主人たる資格に立ち戻つて、彼の頸飾だけでも二寸七八千圓が物はありますよと、大きな聲で内々僕に

教へて呉れた。

老人の語る所に據ると、此のお客の中には音樂家も居れば、法律家も居る、畫工もある、實業家もあるといふ。後で思付いたが、老人は姉妹と獨身者の三人暮しで、金はあるし、仕事はなし、料理が道樂で、時々斯いふ客を招いて、自慢の御馳走をするものらしい。男客は僕の不恰好な燕尾服の外に、格別の異彩を放つたものはないが、女は例のボールトン夫人を初め、孰も寶石や金銀の數々を盡して、ぴか〳〵と光る物ずくめ、身を動かす毎に、頭やら手やら胸やらがきら〳〵とする。夫に衣物一面に箔の樣な金を縫込んだり、玉擬ひの玻璃をつけてあるので、之が亦蛇の鱗の樣にごろとした光を放つ。其の上男の客は大抵背頭の光る連中であつたから、此の一室は正に光明赫燿たるものであつた。其の中に美智子夫人が、指輪の寶石の外に、何一つ仰々しい飾氣のない瀟洒とした日本服に、きりゝと帶を締めた所は、如何にも品が宜くて、僕は能く諸方の宴會に列國の大使公使の金光燦爛たる大禮服の中に交つて、米國大使が雪白のシャツと漆黑の燕

後のスタインバーグ老

尾服こに身を固めたのを見る毎に、一種崇高の感に打たれざるはなかつたが、今夜も亦眞個の美は其の裝飾のない所にあると熟々感じた。矢張り自然主義だ。

兎角する中食事の用意が出來て、お客は一づゝ活版刷の小さな厚紙の片を主人から受取つた。見ると、僕はアリス、スタインバーグ孃の手を取つて食堂に行つて呉れとある。女の手を引いて食堂に連れ行くことのてれ臭さは、僕既に之を説いた。仕方がないから、お孃さんの手を引いて、愈食堂に乘り込む。お孃さんと言つても五十近い人である。

卓子の片方の端には、主人と美智子夫人が坐る。僕と妹さんが其の脇の最初の席に着く。僕の直前がボールトン夫人で、夫れから男女互違ひに居流れて、一番末の片端に姉さんのスタインバーグ孃が、何とかいふ法律家の老人と相列んで居る。卓子の上には、香高きカーネーションの花を枝もたわゝに挿してある。四邊を見れば、壁やらマントルピースやらに、見覺えのある日本の品々。

會話が盛に初まつた。隣から南京豆の鹽煎にしたのを、奇麗な縮緬紙の小さい籠に入れて、廻して呉れる。二つ三つ取つて次に廻はす。今度は橄欖の實の鹽漬を小皿に盛つたのが廻つて來る。觸れば折れさうな太い眞白なセレリが、大きな皿に山と盛つて卓子の眞中に在る。此等は食事の出る前か一皿が濟んで次の皿の來る迄の手ずさみに、お客の摘み取るに任せたものだが、念入の老人が家のことゝて、小籠でも皿でも中々凝つたものだ。ナプキンの疊み方でも、ばり〳〵と紙の樣な奴を花の開いた恰好に拵へてある。獻立書はどいふと、銀の唐草模樣を散らした中へ奇麗に書き込んで、其の後に返した片端が脚になつて、寫眞立の樣に立つてある。見ると、美智子さんは頻に正面の花瓶を見詰めて居る。例に依つて又價を入れてるなと可笑しかつた。

第一番に先づ二種ばかりのホールドウブルが出る。スープが出る。次には鮭の煮たのが出て、其の次には鰈が出た。恥かしながら、魚の二度出る料理は、今度此地へ來て之が初めである。其の次にはスキート、ブレッドが出た。スキート、ブレッドでは今思ひ出しても顔から火の出る樣な失策をしたことがあるが、之は後に説く。兎角する間に、酒はシエ

後のスタインバーグ老

レーから初まつて、緑や、紅や、細長いのや、丸いのや、色々の盃に色々の酒が注がれて、主客孰も大分陶然と參つた。

アスパラガスが出る。英吉利のアスパラガスは、細い青い奴で、日本のよりは遙に旨い。

續いてロースト、ラムが出る、ラムは何處のでも多少ぶんと來るものだが、英吉利のは其の臭味のないのが特色だといふ。之に蓼酢の樣な例のきゆうとしたミント、ソースをかけると、何だか知らぬが心が時めいて來る。僕は英吉利の料理を思ひ出す毎に、必ずグリーン、アスパラガスとミント、ソースの二つが思ひ出される。今度はポンチを間に置いて、ロースト、チキンが出る。魚と同じやうに燒肉も二種出るものかなと思つて居ると、其の次プヂンクに續いて、直ぐジエリーが出た。菓子も矢張り二色出るものらしい。之でさしも の長い御馳走は一應すんで、其處でチーズが出た。今度は植木鉢に蓮の花の眞盛りに咲いたのを植ゑて持つて來る。銘々一本づゝ其の花を拔いて取るから、僕も取つて見ると、花の中にはアイスクリームが一杯に詰つてある。之がすむと、指洗鉢が出て、デザートとなつ

た。指洗鉢の中には、香の高いリ、ー、オブ、ゼ、バリーの白い花を浮べてある。銘々取つて襟にさす。今度はお馴染のブラジルの胡桃が出た。胡桃は鹽をつけて食ふに限るとは、豫て佐藤顯理君から承はつた所であつたが、今日此處で指洗鉢の出た時、スタインバーグ老人から、暑い時は其の水を耳の後につけるに限るといふことを敎はつた。成程、其處へつけると非常に凉しい。香水なら尙宜からうと思つた。

此處で婦人客は別室に引退いて、男ばかり居殘る。珈琲やら、リキユールやらを啜りながら、シガーの煙ゆたかに、氣の置けぬ話にやゝ暫く笑ひ興じた。斯う書くと、丸で「西洋禮式獨案内、食事の部」とでも言つた樣な記事になるが、僕には食事の時よりも、此の食後のシガーが一番嬉しい。去年老人が、飯坂で女と一所に湯に入つた話をしたのも、斯ういふ折であつた。

頓てシガーを一本吹し了つた頃、僕等も別室の婦人客と一所になつた。此處で何某夫人のピアノの彈奏に連れて、お客一人づゝ立つて歌を唄ふ、皆中々旨い。ボールトン夫人の

レシテーションなどは殊に振つたもので、其の「笑ひ上戸」を演じた時などは、滿座一人として笑ひ崩折れぬ者はなかつた。

興は盡きねど、餘りに遲くなつてはと、僕等は一同に暇を告げて此處を出ると、老人態々戸口迄見送つて來て、例の通り自身で呼子の笛を嘲々と吹き鳴す。僕の「大英遊記」には此處の處が間違つてると、倫敦で或人の注意を受けたが、今日は改めて明かに斷つておく。一つ吹けば四輪馬車が來る、二つ吹けばハンソムが來るのだ。

馬車の轍がサウス、ハムプステッドの大通を軋つて行くと、兩側は新綠滴らんとする菩提樹の並木に電燈の光がさして、坦々として砥の如き大道が見る目遙に續いてゐる。如何にも自然主義ではだめだ。（五月七日）

六、新聞記者責め

（上）

倫敦に着いた翌日は、雨模樣でもあり、用事もあり、旁、見物は見合せて、朝からホテ

ルの一室に立て籠つて、紐育以來の通信を悪命に書き初めた。

電話が頻にかゝる、新聞記者が續々尋ねて來る、通信どころの騒ぎでない。澁々下に下りて行くと、ラウンヂに「クロニクル」のロヅン君が來て居て、頻に原稿の催促をする。仕方がないから、片隅の長椅子に腰を下して、一段許りの記事を喋つて書き取つて貰ふ。今度は「ミロア」の某君が來る。例の「ミカドー」の話や何か、問ふに任せて話して聞かせる。此の人長椅子に半ば身を横へて、ゆるり〳〵と口を利いて、中々急に動かぬ。やつと歸つて呉れたので、自分も部屋へ歸ると、又電話だ。

電話係が美人だからといふ譯ではないが、何もちりん〳〵と來ると、落着いて原稿なんど書いて居れぬ。何だと聞くと、「ミロア」から人が來て居るとのことだ。「ミロア」なら今會つた許りだがとは思つたが、又てく〳〵、段階子を下りて行くと、「ミロア」の寫眞師が一周會員の寫眞を取りたいと言つて來たのであつた。夫がすむと、「エキスプレッス」が來た。次手だから玄關脇で立話をして居ると、「スタンダード」の記者が亦見える。雙方同時

新聞記者賞め

にお話するから、何でも聞きたいことがあるなら聞いて呉れと、捨鉢に成つて身構へると、「エキスプレッス」の記者は呵々と笑つて、『雙方同時では困る、「スタンダード」の樣な老祿新聞と一所にされて堪る者でない、彼はよぽついて居るのだ』といふ。「スタンダード」は「スタンダード」で、「エキスプレッス」の樣な小新聞の材料になることは當方の材料にならぬと言ひ爭ふ。此の兩新聞は、前に「タイムス」を乘取らうとして失敗した例のペアスン氏の經營する所で、兩つながら持主は同じだから、冗談半分にいろんなことを言つて揉め合ふものと見える。大夢和尚と僕とが始終喧嘩する樣なものかと可笑しい。『そんな小面倒なことを言ふなら兩方共お斷りだ』といふと、氣の宜さうな兩人は打笑つて、何れ夕方皆の歸る頃に又伺はうと言つて、歸つて仕舞ふ。夫れでも「エキスプレッス」は可愛らしい。翌日の新聞には斯うある、曰く

Mr. Sugemura is a young man with a face that is full of keen intelligence from the high, wise forehead to the thoughtful eyes behind his spectacles.

He speaks English perfectly, and his manner has all the charm and dignity of a Samurai.

スゲムラ氏は年若き人にて、其の高く賢しげ(!)なる前額より、眼鏡の後に潜める分別あり氣(!)なる兩眼に至るまで、顏は鋭き才氣に充ち滿ちたり。(!!) 彼は英語を操ること極めて(!)巧にして、其の立居振舞にサムライらしき愛嬌と威嚴とを盡く具へたるなり。(!!!)

とある、僕も社では一向珍重して呉れぬが、倫敦に來ると何時も之だ、餘り安く見て呉れるなと書き添へて、此の切拔は本社に送つた。

部屋に歸つて二三行書き出すと、又電話だ。「メール」から來た人だといふ。折角だが今忙しいから斷つてくれと返事したが、暫く經つて、美しい此處の給仕が名刺片手に倫敦訛か何かで、『ア、ジェントルマン、ス、リイチング、ダウンスタヤス（お客が下に待つて居る）』と言つて來た。見れば名刺の主は「メール」のビューッ君で、其の脇に「ノースクリッフ卿用事」と、書き入れてある。園遊會の打合せと察した。此奴は斷る譯には行かぬと、又もやあたふた三階を下りて行く。

新聞記者賞め

新聞記者賣め

そんな斯んなで、到頭畫前は丸潰れに潰れて仕舞つた。

（下）

本社への通信丈けなら、一日二日後れても太した差支はないが、「タイムス」への原稿は、是が非でも今日書かなくては間に合はぬ。畫の食事のすんだが最期、今度こそはと、玄關番には固く來客を斷らせ、室内電話機の受話器を外して、戸口にはしかと錠を下し、而して上着を脱いで、さあ來いと許り構へた。

程なくこつ〳〵と部屋の戸を叩く奴がある。例の美しい給仕かなと思つて、開けてやると、五十恰好の薄い八字髭を生した三白の目付いやらしい男が、碌々挨拶もせずに、づかづかと這入つて來て、突然長椅子に腰を下した。何の御用と聞けば、此の男薄汚ない名刺に日本字を入れたのを出して、さて、「亞米利加では」と口を切る。『亞米利加では盛に行はるゝ職業だが、近頃歐羅巴にも亦追々流行かけて來た新聞通信の材料供給を業としてゐる者だ。』といふのである。米國に一種立ン坊式の通信者が有つて、何處の新聞社附ともいふ

ことなく、手當り任せに材料を渉獵り歩いて、之を新聞社に賣り附ける商賣のあることは前に述べたが、此の男は正しく夫れなのだ。其處で、先生滔々と自分の履歴から說き初めて、日本の誰やらも知つてる、彼とかも懇意だと、止度もなくまくし立てる。さあ大變な奴に舞ひ込まれたものだ。

僕は宜加減に待つて、今忙しいからと斷ると、幾何忙しくても、ほんの少しで宜いから、何か話して呉れと、そう〳〵手帳を出しかける。大急ぎの原稿を書いて居るので、迚も貴意に應じ兼ねるといへば、折角來たのだから左樣言はずに、是非二つ三つ質問に答へて呉れとて、挺でも動きさうにない。僕も今朝から原稿は丸で書けず、氣はいらつ許りで、時は遠慮なく經つて行くので、忌々しくて堪らぬ。『君も同業者なら思ひやりのありさうなものだ。急ぎの原稿で一刻も君方の相手は出來ぬと言つたら、出來ぬに定つてる。强ひて管々しく人の邪魔をするとは、餘りひどいでないか。』と無愛想に怒りつけた。定めて怒つて歸るだらうと思つたに、件の男は急に言葉使を丁寧にして、『いや御邪魔をした段は誠に相す

新聞記者賞め

みせぬ、併し――』、まだ何か言ふらしい。『いや「併し」は御免です』と、僕はにべもなく言つて除けた。

雙方暫時無言、男は天井から寢臺の邊をぢろ〳〵と眺め廻して居たが、稍程經て「ウエル、ミスタ、スギムーラ」と又初めた。僕は一切無言、其の男は虚に乘じて、盛に何やら喋り出す。僕はもう我慢がならぬ。思はずつゝと立ち上つた。日本なら斯んな時に旨い威し文句の出るものだが、英語ではさう旨く行かない。昔學校で素人芝居の稽古をした時の臺詞を思ひ出して、立ち上つた儘何如にも苦々しさうな顔をしながら、緩々と一語々々に力を入れて、「マイ、デア、サー」とやつた。之は思の外旨く出來た。樣子只ならずと見て取つた三白の男は、次の言葉を聞く迄もなく、手帳を片付て急に腰を上げる。『夫れでは殘念ながらお暇を』と言ひながら、今度は眞實に立つた。

『併し私も折角三階迄之ばかりの用事に伺つたのですもの。』さゐた其のツレぬかしをる。僕は默つて居る。彼れは二歩三歩立ち退いて、『時に日英同盟の期限ですがね』と何如にも

意味ありげにいふ。僕はつい釣込まれて顔を上ると、上るが早いか、男は滿面に愛嬌を湛へて、又元の所へ舞戻つて來て、今度は日英同盟に關係も何もないことをすら〳〵辯じ出す。僕もやれ仕舞つたとは思つたが、今更取り返しがつかぬ。已むを得ず要領を得ぬ話を二つ三つして、快よく手を握つて分れやうとしたが、元より以て此の時の話は材料になるものでも何でもない。如何にも物足らぬらしい顔で出かけやうとした彼は、戸口まで行つて後、此處で一寸後ふりむいて、『廣東のボーイコットが其の――』と又釣りにかゝる。もう其の手は喰はぬ。僕は腹立ち紛れに、唯一言『大概にしろ』とやりつけた。之には參つたものと見えて彼は戸を荒々しくぼんと閉めて、大きな舌打を一つして行つて仕舞つた。僕が英吉利の土地に足を踏み入れて、腹の底から怒つたのは天にも地にも此の時限りである。

やつと邪魔物を追拂つて、再び机に向つて、書き直し〳〵大難産の末に、漸く原稿が出來上つて、早速之を「タイムス」迄持たせてやつた後、もう之で安心と、電話の受話器を元へ返せば、直ぐちりん〳〵と來て優い女の聲で、『お客樣が』と報せて來た。誰でも宜いから

後のデビス老人

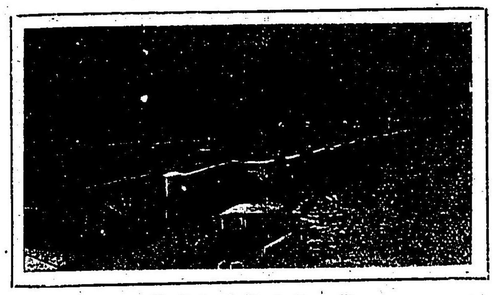
通して下さいと返事すると、間もなく例の美しい給仕に案内せられて、莞爾々々と入つて來たのは誰あらう、レミントンのデビス老人であつた。（五月三日）

七、後のデビス老人

停車場で分れたデビス老人には、其の後屢逢つた。

ホテルに着くと間もなく追駆けて來て、自分は態々君の爲にレミントン三界から出掛けて來たのだから、何か用があるなら遠慮なく言つて呉れと言ふ。僕は日本に居る時夜深けて宅へ歸ることが多いので、外から錠前を開けられる最上のラッチが二箇ばかり欲しかつた。老人の好意に甘へて、之と外に二つ三つ買物を頼んで置いたら、四五日經つて送り屆けて呉れた。其の時、之は條件附で君に遣るのだといふ。何な條件かと聞けば、一度私の宅迄來るなら之はたゞ呉れるし、來なければ金は君が拂ふのだとのことだ。兎も角其の時は言ふ通り三十志程拂つて置いたが、其の後僕がレミントンの老人の宅へ着いた時、老

後のデビス老人



テームス河畔の夜景

人は僕の顔を見るなり、刻銘に紙を包んで燐寸箱に入れた三十何志何片だかの金を衣嚢から取出して、それとばかりに僕に呉れた。

倫敦に着いた翌日來た時は、丁度前に出た新聞記者に窘め拔れた後で有つたので、實は今しも斯ういふことが有つてと話すと、老人大に僕に同情を表して、『倫敦には一體忌な奴が多い、だから私なども倫敦へ出て來る時は、何時も護身用に斯な物を持て歩く。』と言ひながら、洋袴の衣嚢から妙な物を取り出して見せた。何だか六かしい名で有つたから名は忘れたが、眞鍮製の太い指輪を四個聯ねた樣な物で、之を右の手の指に恢めて手を握ると、丁度握拳の外側へ指輪の脊に在

後のデビス老人

る尖つた物が出る。いざ喧嘩といふ時は、拳を固めて之でぐつと敵の脇腹を突くのださうな。丁度希臘人のセスタス見たいな物だ。短銃を使ふと、大きな音がする上に、中り所に依つては人を殺すが、此奴は音も立てず、滅多に殺しもせぬ。尤も、手強くやれば、肋骨の二三本は折れないこともない』と老人はえらいことをいふ。さう言ひながら、老人は之を嵌めて力聲と共に頻に空を突いて居る。うんッ！うんッ！　僕はハガードの小説に在る片目の親父が、小尾の中で昔の手柄話をして聞かせた光景を思ひ出して、老人がセシル、ローズの下にトランスバールで騒ぎ廻つた時の樣があり〳〵と目に寫る。

其の夜は、老人の姉に當る人の家へ遮二無二人を引張つて行つて、姉さんは其處除にして、滔々と日本と加奈陀の工業聯合策を論じた。翌日は『今日午後四時家に居て呉れ、緊急の用事がある。』との電報を寄越したので、何事かと思つて待つて居ると、從姉の所へ茶を飲みに行かうといふ丈の話だ。今日は差支があると言へば、夫れなら此處で一應話しておくがとあつて、玄關脇に立ちながら、又滔々と對米國艦隊策を辯ずる。

其の翌日は、丁度レミントンから寶石商のチャンドラー君が態々出て來たので、老人とチャ君の外に、三四人相會して、チエアリング、クロース、ホテルで晩餐を共にした。此の食事の中にスキート、ブレッドが出たが、老人は非常に旨いと喜んで二皿平げた。謹んで白狀するが、僕は去年以來今にスキート、ブレッドの何たるかを知らない。文字だけ讀めば「甘い麵麭」とも思はれるが、食つて見れば、何だかの肉だ。今まで度々給仕にも聞き、友人にも尋ねたが誰も知らぬ。去年下宿で向ひ合せに坐つたコンベア嬢にも、フキリップ夫人（き）にも聞いたが、一向要領を得ない。今日こそはと思つて老人に聞くと、牛の腦髓だと言つて濟してゐる。牛の腦髓なら僕も知つてるが、こんな固い物ちやない。腑に落ちぬ樣な顏をして、不圖チャンドラー君の顏を見ると、チャ君は小聲でナット〳〵といふ。ナットは Not で「さうでない」との意味と、僕は無論解した。所が、隣に居たクラークといふ男が、小聲でナッツ〳〵といふ。之を聞くと均しく僕は眞赤になつた。此處は男許りだから宜いが、去年彼の女客に尋ねたことを思ひ出すと、正に顏から火が出る。ナッツといふ

後の英國議會

は翠丸のことで、スキート、ブレッドとは牛の翠丸である。チャ君はナットと洒落れたのだが、悟の悪い僕と見て、クラーク君が註釋を加へたので漸く分つた。成程、今迄誰に聞いても教へなかつた筈だ。――僕は僕の名譽の爲に、此の一節の轉載飜刻拔萃及び英譯を固く禁じおく。

二三日經つて、老人は再會を約して、レミントンに歸つた。歸つた其の夜電報を呉れたが、其の文に曰く、『バチントン、英吉利の宅、七三〇。』謎張り分らぬ。チャ君に相談しても分らない。後にレミントンで會つた時に聞いたら、バチントンから僕が英吉利の宅（老人は自分の宅を僕の英吉利の宅といふ）の所在地レミントン迄來るに、午後七時三十分發の宜い汽車があるとの報知で有つたさうな。そんな判じ物の樣な電報が分るものかい。

八、後の英國議會（一〇）

テムスの流を眼下に見下す議會のテレースに、今しも黄色いのが四五十人、白いのが十

後の英國議會

餘人、倫敦の春尚淺きうすら寒の風の中に立つて居る。議會の中を見て廻はる間は、靜に靜にと許りで、靴音は立てられず、口は利けず、其の上煙草は元より喫へず、おづ〳〵と歩き廻つた揚句、初めて此のからりとした處へ出たので、孰も皆ほつと息を吐いた。左なきだに濛々とした倫敦の空が、今日は折あしく晝頃から曇り出して、今にも一村雨の落し來さうな樣樣。――是でも暑い時は、此處に椅子を並べて、川を見ながら茶を喫むのが、一番議員の樂みとする所ですと、案内に立つた歡迎委員長のホーニマン君がいふ。實にもテレースは、議員のみかは英國上流の婦人が、孰れも此處へ茶に來るので、時候の宜い頃は、五時前後に非常な賑ひださうな。

今日は議員が九人で、議院の端から端迄殘る所なく案内して呉れた。ウエストミンスター、ホールから初めて、例の八角のセントラル、ホールに出て、圖書室議員控所を廻つて、上下兩院の議事を傍聽して、最後に下院圖書室の横手から出て、此のテレースへ來たのである。

此處へ來る迄には、隨分さま〳〵のものを見た。先づ院内處々に自動裝置の電信機がある。きち〳〵と音を立てゝ、何やら書いた卷紙が吐き出されて、世界中の出來事が此處で絶間なく報道されて居る。亞米利加でも英吉利でも、取引所や議院を初め、氣の利いたホテルには、必ず之があるが、日本にはまだ何處でも見たことがない。又處々自動裝置の院内報告が出る。がちやんと音して、横に長い紙が幻燈の樣に脇に寄ると、「何時何十分誰某演説始まる」と出て來る。之が議院内三十餘箇所に仕つらへてあるので、何處に居ても、議場の模樣が直知れる。此の外日本でないものを擧ぐれば、あんな大きな圖書室もなければ、あんなに氣の利いた食堂もない。其の外、見はしなかつたが、斬髪屋もある、風呂場もある、骨牌と玉突は禁ぜられて居るが、將棋をさし、新聞を讀むに都合の宜い、居心地のよさゝうな部屋が有つて、議會に出席しながら暢氣に遊び暮さうと思へば、下手な倶樂部へ行つた程の設備があるといふ。

上院では、細い薄暗い廊下をくる〳〵と廻つた揚句、何やら鹿爪らしい聲で言ひ爭ふ樣

なのが聞えたので、我知らず立止ると、靜に〳〵と案内の議員が制する。何だと聞けば、上院の議場で今裁判が開けて辯論中だといふ。（上院が英國に於て最終審の裁判所で、其の議長が大法官であることは誰も知つて居る。）僕等は何時の間にやら廻り廻つて、議長席の後、玉座の直横に出たのである。見ると、白髪の長儼かに被り、袖幅廣き黑の法衣を着た大法官が正面に腰をかけて、其の前に、四五人矢張同じ服裝の人が、何か話し合つて居る。傍聽人は遙か後に唯一人。裁判といふのは、某鐵道會社の係爭事件とかで、辯論といふと大きいが、何だか滿足に近い無聊の樣に、一向ひつそりとしたものだ。

議場の後に、ロイアル、ガラリーとて、議場よりも廣いかと思はるゝほどの部屋がある。其の後が皇帝の便殿で、開院式の當日、此處から議場へ向はせらるゝ皇帝を、此のガラリーの兩側で、議員の家族などが御見上げ申すのださうな。此處の壁には、片方一面にトラフワルガーの戰後、ネルソンが負傷して倒れたところと、片方には、ヨータールーの戰ひ終つて、ウエリントンと普魯西のブルーヘルとが相會した所と、英國史上の二大事件を畫

いてある。

便殿には、一段高くなつた正面の玉座に、御召の椅子を据ゑて、三方は綱で人の近づけぬことにしてあるが、僕等と同時に此處へ入つた英吉利人は、十歳許りの女の子を此の中に入れて、一度其の椅子に腰をかけて見よといふ、女の子はづか〳〵とおめず臆せず椅子に着いて、正に女皇陛下といふやうな餘所行の顏をして濟したので、其の親も笑へば側に居た守衛も笑つた。日本ならば、笑ふ所か、大變な騷ぎになる所である。尤も、日本で女の子一人に許したら、我も〳〵と居合す者が、老爺も婆さんも、皆腰をかけて見るに相違ない。其處等も少し英吉利には日本と違つた所がある。

下院では、二階の傍聽席に陣取つて、やゝ暫く議事の模樣を見て居たが、丁度愛蘭問題の討議中なので、一向面白くも何ともないものであつた。我等の席から見ると、直正面の二階が新聞記者席で、其から少し高くなつた所に、例のゲージとて、鐵の細かい格子を入れた婦人傍聽席が見える。一寸御簾中といふ姿だと、皆々小聲で言ひ交はす。婦人傍聽席

は僅に三十二席しかないので、議員が毎日籤を抽いて、當つた者十六人が各二席づゝ取ることゝなつてゐる。場所は御覽の通り息の詰る樣な窮屈な所ですが、夫でも婦人に取つては、此處に入ることが中々の特權ですと、僕の隣に居た議員のコリンス君が話して呉れた。傍聽席の少いことゝいへば、英吉利本國の人口が約四千四百萬、海外の所領を加へて四億に係る人口に對し、下院の傍聽席が僅に百三十席しかない。尤も傍聽席は、席がないなら傍聽しない迄で濟みもしやうが、議員六百六十九に對して、二階の議員傍聽席を加へても四百三十人分の議員席よりないに至つては、驚かざるを得ない。其の又二階の議員傍聽席なるものは、議場の左右兩側に仕つらへたもので、此處に席を占めた者は腰掛にありついた迄で、無論發言の權利も何もない。下院の議場に下院議員の傍聽席を置くなどゝは、役者と見物がごつちやになつた樣なもので、迚も外の國では見られぬ所だ。其處で、議事が重要な問題になると、議員は我先にと席を取合つて、席の無い者は議席の間の通路や議長席の近邊に犇々と立圍む。そんな窮屈なことなら、早く議場を改築すれば宜さゝうなも

後の英國議會

のだが、其處が其の英吉利流の變つた所で、初め建てた時に三千萬圓の工費と二十年の歳月をかけて、百千年の星霜も物かはとばかり、頑丈一方に作り上げたので、今更一寸取擴げも建增しも出來ないのだといふ。

世の中に議會も數々あるが、英吉利の議會の樣に四角な議場は滅多にない。又演壇の丸切りないのも餘り外には見當らぬ。殊に議員に夫々定まつた議席のないに至つては、恐らく世界中に類があるまい。夫でも英吉利人は、演壇のない爲に議事が鹿爪らしい辯論風にならずに、打解けて親しく相談し合ふ樣な風になり、議員の定まつた席がない爲、樣々の人が誰彼なしに交り合つて隣同志になるので、議員が互に親しくなり易い利益があると、負惜みを言つて居る。

見ると、議場の中で平氣で高々とシルクハットを被つて居る者が大分ある。之なども露國の議會にでも行かねば見られぬ所である。併し、此の帽子は其の昔議院の建築が今程完備しない時、窓の隙間を洩る寒風を防ぐに備へたのから起つた何百年來の習慣ださうな。

成程、何百年來の習慣々々と習慣好の英吉利人の言ふ丈あつて、此の帽子を被るにも、亦樣々の習慣がある。先づ此の帽子は議席に坐つて居る時こそ被つて居ても宜いが、立上つた時はさうは行かない。又坐つた時でも、他の議員の演說中に言己れの事に及んだ時とか、議長が自分の名を呼び上げた時とか、氏名點呼の折點呼を行ふ書記官に挨拶する時とかには、矢張り之を脫がなければならぬ習慣になつて居る。

まだ變な事がある。議長の直前に有名な大卓子がある。此の卓子の中には何が入つて居るか、幾百年來誰も開けて見たものはないが、其の上には議長の尊嚴を代表する例のメースが載せてある。所で議席の前列に腰を掛けた內閣大臣や左黨の領袖達は、之を丁度よい足の載せ所と見て、靴のまゝ兩足をその上に投出して、さも心地よげに踏ぞり返ることが屢ある。「尊殿」といふ尻からそもゝ是れだ。

まだ一つ變なものがある。此の大卓子の上には、二分時間を計る砂時計が一個ある。元來英吉利の議會で可否の採決をする時は、上院では、「コンタン（贊成）」か、「ノ、コンタン